金沢市

# 二ッ屋町遺跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる

埋蔵文化財発掘調査報告書4

1998

石川県立埋蔵文化財センター

金沢市

# 二　ッ　屋　町　遺　跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる

埋蔵文化財発掘調査報告書4

1998

石川県立埋蔵文化財センター

# 例　　言

1　本書は石川県金沢市二ッ屋町に所在する二ッ屋町遺跡の第１次・第２次・第３次発掘調査報告書である。

2　二ッ屋町遺跡発掘調査は金沢西部地区土地区画整理事業に伴うもので、各調査の調査期間と調査面積は以下の通りである。

第１次調査　平成元年６月26日～同年７月28日　約1,300㎡

第２次調査　平成７年11月８日～同年12月26日　約2,500㎡

第３次調査　平成８年４月９日～同年６月13日　約2,300㎡

3　本報告書の発掘調査はいずれも石川県土木部都市計画課（第１次調査は金沢西部開発室（現金沢西部開発事務所）、第２・３次調査は金沢西部開発事務所）の依頼を受け、石川県立埋蔵文化財センターが実施した。第１次調査は、栃木英道（主事）、中屋克彦（同）が、第２次・３次調査は調査第一課長中島俊一の指導の下に、第２次調査は、伊藤雅文（調査第一課主任主事）、松山和彦（同主事）、西井康雄（同技師・土木部技術管理課併任）、松浦郁乃（同講師）が、第３次調査は、伊藤雅文、熊谷葉月（同嘱託）が担当した。

なお、第１次調査では大藤雅男、北野裕保、第２次調査では福田弘光、第３次調査では海野美香子の諸氏の補助を得た。

4　発掘調査と報告書の刊行にあたり、石川県土木部都市計画課、金沢西部開発事務所、㈳石川県埋蔵文化財保存協会、㈱太陽測地社の協力を得た。

5　本遺跡出土遺物の整理作業は、第１次調査については洗浄・記名・分類・接合を平成元年に直営で行った。第２次調査については洗浄を平成７年度に㈳石川県埋蔵文化財保存協会へ委託し、記名・分類・接合は平成８年度に直営で行った。第３次調査は洗浄・記名・分類・接合を平成８年度に直営で行った。復元・実測・トレースは３次調査分全てを平成９年度に、㈳石川県埋蔵文化財保存協会へ委託して実施した。

6　本報告書の執筆・編集は各調査担当者と協議の上、松浦郁乃・熊谷葉月が行った。執筆分担は文末に記した。

7　本調査の出土遺物、記録資料は一括して石川県立埋蔵文化財センターで保管している。

# 目　　次

第１章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 1

第２章　経緯と経過
第１節　調査に至る経緯 …… 4
第２節　調査の経過 …… 5

第３章　遺　　構 ……11

第４章　遺　　物
第１節　弥生時代 ……20
第２節　古代以降 ……21
第３節　石器・木製品 ……22

追　　補

報告書抄録

写真図版

# 第１章　位置と環境

## 第１節　地理的環境

金沢市二ッ屋町遺跡は、石川県金沢市北部の沖積平野北縁部に立地する。金沢の市街地中心部から北西約４㎞、日本海に開く金沢港の方向へ離れ、金沢港からみると南南東へ約２㎞内陸に入る。市内を貫流し、日本海に流れ込む犀川と浅野川ともそのちょうど中間地点に位置し、周辺はその支流や用水が縦横にめぐる低湿地帯である。

近代以前は、海岸と遺跡の間には砂丘後背地としての小丘陵や微高地が存在し、現在よりかなり起伏のある状態であったものと推定されている。

二ッ屋町は南北に長い町域を持ち、国道８号線・北陸自動車道で南北に二分されており、遺跡の範囲はその北半部にある。

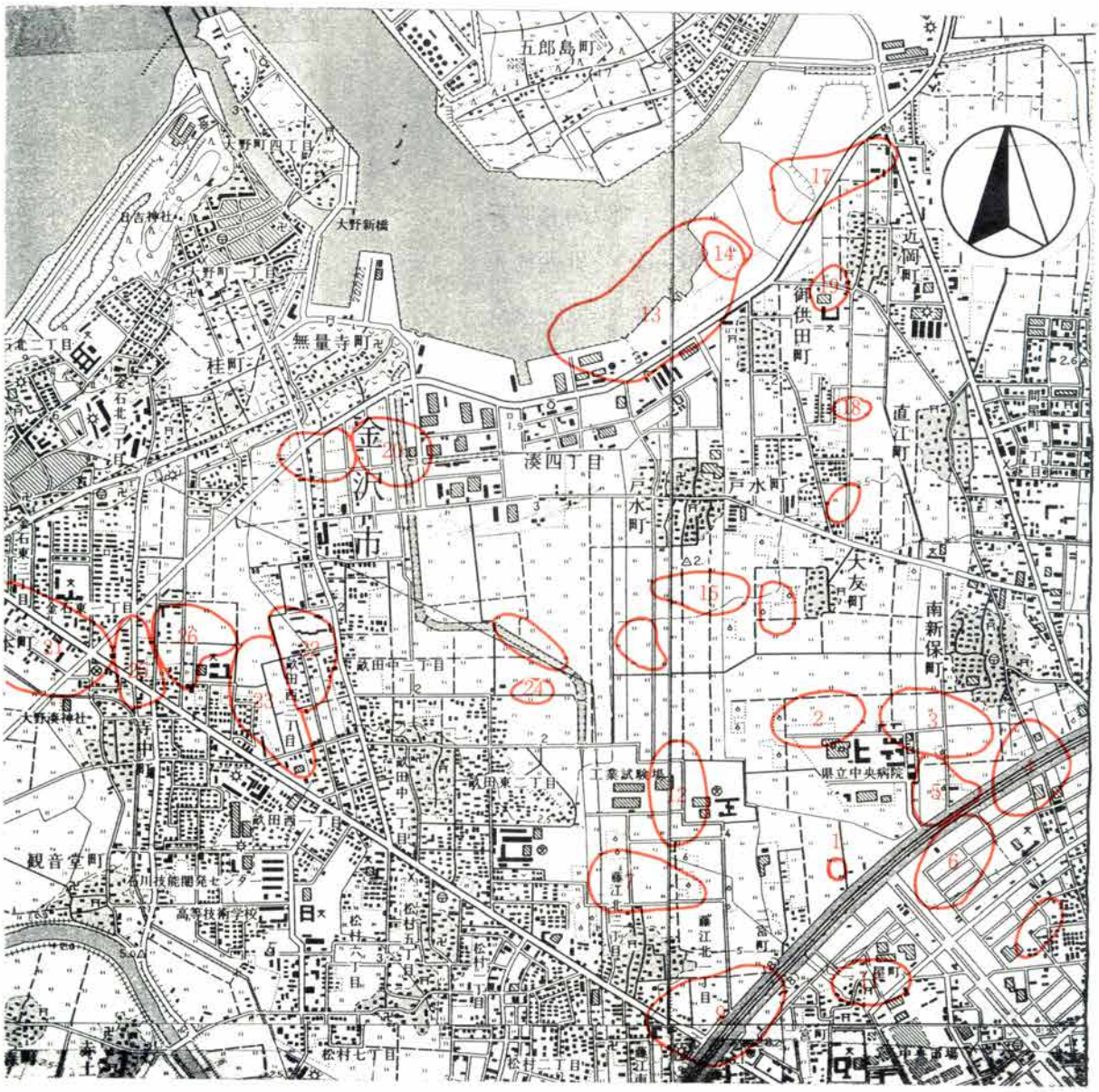
## 第２節　歴史的環境

周辺は、県内でも有数の遺跡密集地帯である。戸水、藤江、西念・南新保、南新保といった大規模な遺跡群が存在し、本遺跡はそれらに囲まれるように立地する。周辺遺跡の調査は、昭和40年代の北陸自動車道建設、国道８号線整備にともない始められ、昭和50年代の金沢駅西地区の再開発や近年では県や金沢市による区画整理事業、開発事業とともに、件数、規模とも急増した。また本遺跡の約0.5㎞北西に位置し、平成13年に予定されている県庁移転地も戸水Ｂ遺跡の範囲内である。周辺整備も含めて、これからも多くの調査が予想される。近年来の調査成果にはめざましいものがあり、開発の代償としてではあるが、周辺地域の歴史像が新しい事実を加えながら、明確にされつつある。

この地域で最も古いとされる遺跡は縄文時代晩期の近岡遺跡である。包含層からの土器の大量出土であり、明確な遺構は検出されていない。

弥生時代になると、遺跡数もその広がりも増加、拡大する。本遺跡も弥生時代中期の条痕文系土器が河道跡から一定量出土したことから特徴的存在となっている。中期末の標識遺跡とされる戸水Ｂ遺跡、小銅鐸や銅剣の出土した藤江Ｂ遺跡、畝田遺跡、寺中遺跡など弥生時代後期に入るとその傾向はさらに強くなる。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけて集落以外にも方形周溝墓や土坑墓、古墳が築造される。現在は見られなくなってしまった微高地地形上に古墳や墳丘墓が築かれていたとされる。それらは古代以降の開発、特に大正時代から始まる大規模な耕地整理事業などによって削平されたものと考えられている。戸水Ｃ古墳群、藤江Ｃ古墳群、西念・南新保遺跡など、発掘調査によって周溝が検出され、その存在が確認された例が少なくない。最も近くでは、南新保Ｃ遺跡でも弥生時代後期の方形周溝墓




第２図　遺跡の位置

| No. | 遺跡名 | 種別 | 時代 | No. | 遺跡名 | 種別 | 時代 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 二ッ屋町遺跡 | 集落 | 弥生・奈良・平安 | 14 | 戸水Ｃ古墳群 | 古墳 | 古墳 |
| 2 | 南新保Ｅ遺跡 | 集落 | 古墳～中世 | 15 | 戸水遺跡群 | 集落 | 弥生～古墳 |
| 3 | 南新保Ｃ遺跡 | 集落 | 弥生・古墳 | 17 | 近岡遺跡 | 集落 | 縄文・弥生 |
| 4 | 南新保Ｄ遺跡 | 集落・古墳 | 弥生・古墳 | 18 | 近岡カンタンボ遺跡 | 集落 | 弥生～古代 |
| 5 | 南新保三枚田遺跡 | 集落・古墳 | 弥生・古墳 | 19 | 近岡ナカシマ遺跡 | 集落 | 弥生・古代 |
| 6 | 西念・南新保遺跡 | 集落・古墳 | 弥生～古代 | 20 | 無量寺遺跡 | 集落 | 中世 |
| 7 | 藤江Ｃ遺跡 | 集落 | 縄文～中世 | 21 | 金石本町遺跡 | 官衙 | 古代 |
| 8 | 藤江Ｃ古墳群 | 古墳 | 古墳 | 22 | 畝田遺跡 | 集落 | 縄文～中世 |
| 9 | 藤江Ｂ遺跡 | 集落 | 弥生～古代 | 23 | 畝田・寺中遺跡 | 集落 | 古墳～中世 |
| 11 | 二口六丁Ｂ遺跡 | 集落 | 弥生 | 24 | 畝田ナベタ遺跡 | 集落 | 古代 |
| 12 | 戸水Ｂ遺跡 | 集落 | 弥生 | 25 | 寺中遺跡 | 集落 | 弥生 |
| 13 | 戸水Ｃ遺跡 | 官衙 | 古代 | | | | |

・土坑墓群、古墳時代前期の前方後方墳、方墳を中心とした古墳群が確認されている。この時期の遺跡の中でも西念・南新保遺跡は、地域の拠点集落的性格を指摘されている。

古墳時代中期から奈良時代前半までは、遺構・遺物の検出例が少なく、空白期とされる。周辺の地域が古代において明確にその存在が捉えられるようになるのは、8世紀後半から9世紀はじめにかけてである。この頃にも遺跡数は再び急増する。この地域を含む加賀北部では初期荘園開発が盛んになる時期にあたり、藤江Ｂ遺跡では「石田庄」、戸水大西遺跡では「伯庄」の墨書土器が出土している。これらの名は、文献にみられないが、両遺跡とも大型掘立柱建物跡群が検出されており、荘園の管理施設として認識されている。また、金沢港沿岸の戸水Ｃ遺跡では、大型建物跡群が官衙的配列で検出されており、「津」墨書土器が示すように、古代の港湾官衙施設と推定されている。

金沢港沿岸に立地する普正寺遺跡ではまとまった量の貿易陶磁器片などが出土しており、中世貿易の拠点としての大野湊の存在と、その中心施設の存在を示すものとされる。

周辺地域は、中世には大野郷に属している。13世紀後半、南新保Ｅ遺跡では掘立柱建物が溝で区画された土地に建てられており、中世農村の散村的な景観が想定される数少ない調査例である。

近世遺跡の数は中世よりもさらに減少する。距離的に最も近いものでは、畝田遺跡などがある。調査例が少なく、遺跡として認識されたのが、最近であるためであり、これからの調査で増加する可能性がある。（熊谷）

**参考文献**

『西念・南新保遺跡Ⅳ』金沢市文化財紀要119　金沢市教育委員会　1996年
『戸水Ｂ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1994年
『戸水Ｃ遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1996年
『畝田遺跡』石川県立埋蔵文化財センター　1991年
『戸水遺跡群』金沢市文化財紀要133　金沢市教育委員会　1997年
『金沢市藤江Ｃ遺跡Ⅱ』石川県立埋蔵文化財センター　1997年

# 第２章　経緯と経過

## 第１節　調査に至る経緯

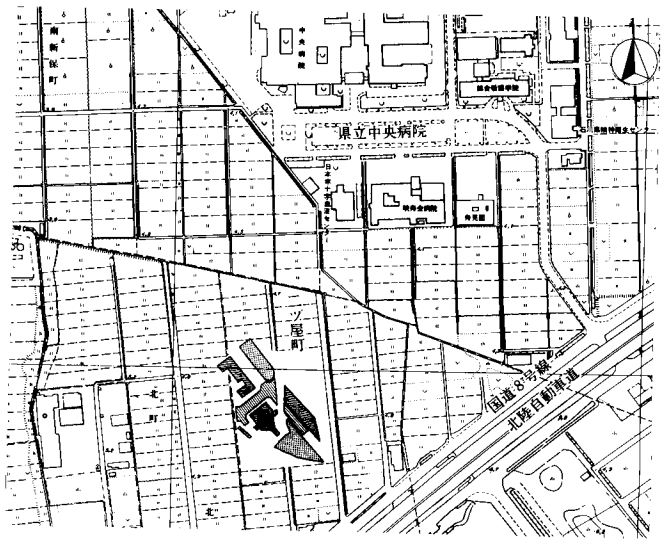
二ッ屋町遺跡の発掘調査は金沢西部地区土地区画整理事業にかかるものである。平成元年５月１日付け金高架発第55号にて金沢駅鉄道高架事務所・金沢西部開発室（現金沢西部開発事務所）より依頼を受け、同年５月９日～10日にかけ金沢市二ッ屋町地内において約3,500㎡の試掘調査を実施した。その結果、新たに遺跡が発見され、同事業の戸水Ｂ遺跡第４次調査と並行して、約1,300㎡について発掘調査を行うこととなった。

第２次調査は平成７年４月３日付け金西部第31－２号にて、第３次調査は平成８年３月13日付け金西部第644－３号にて石川県土木部都市計画課・金沢西部開発事務所より依頼を受け、それぞれ約2,500㎡と約2,300㎡の発掘調査を行った。第２次調査については、同年には同事業にかかる藤江Ｂ遺跡、南新保Ｅ遺跡の調査が先行して行われていた。当初藤江Ｂ遺跡の担当者が調査終了後に入る予定であったが予定通り進まず、南新保Ｅ遺跡の調査が順調に進んでいることから、まずそちらの担当者が調査に入ることとなった。調査面積は金沢西部開発事務所より要望のあった優先箇所の約700㎡を終了させることとなった。実際現地にはいると、遺跡の縁辺部と思われていた地点に遺構が集中しており、更に遺跡の範囲が広がる可能性がでてきた。11月下旬には藤江Ｂ遺跡の調査も終了し、２班合同での調査となったため、調査区を拡張し最終的には約2,500㎡を調査した。同時に遺跡の範囲も確認し、次年度の調査範囲のおおよその確認も行った。

第３次調査は例年の調査開始より早く平成８年度４月早々から着手された。事業工事期限のほか、同年度中に南新保Ｅ遺跡、南新保Ｃ遺跡の調査も同じ班で行う予定であったので、日程的に余裕がなかったためでもある。掘立柱建物跡の存在が確認された十字状のトレンチ（Ｂ区）を面的に広げる（Ｆ区）など、第２次調査で確認された状況をもとに調査区を設定した。検出遺構などの状況もほぼ予想された内容であった。６月初旬より航空測量日程調整も含め、南新保Ｅ遺跡第２次調査を並行して行い、ほぼ当初の予定通り、６月下旬に調査を終了した。

なお、金沢西部土地区画整理事業に係る二ッ屋町遺跡の発掘調査は第３次調査をもって全て終了した。

（松浦）




第３図　調査区の位置

## 第２節　調査の経過

第１次調査

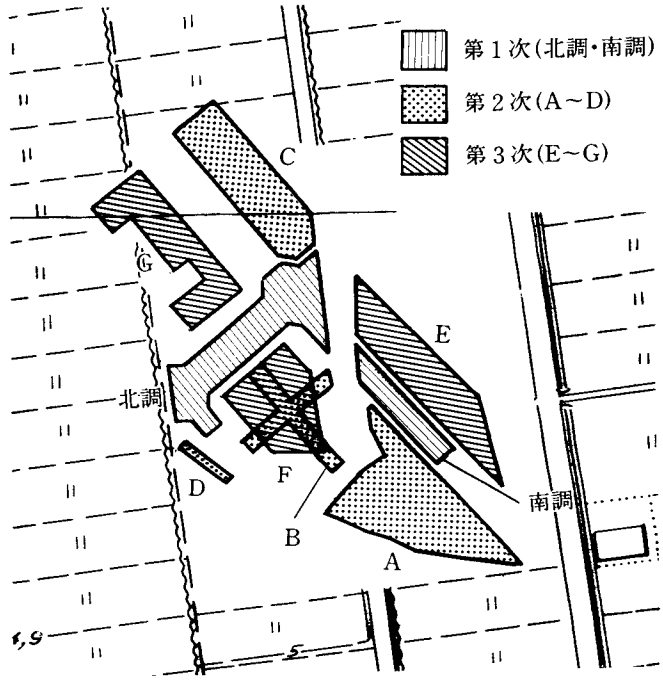
| | |
|---|---|
| ６月22日 | 機材搬入 |
| ６月26日～28日 | 重機による表土除去作業　遺構検出作業 |
| ７月10日～ | 北調査区検出、掘削開始 |
| ７月14日～ | 南調査区検出、掘削開始　調査区杭打ち |
| ７月20日～24日 | 平板測量 |
| ７月25・26日 | 重機による埋め戻し |
| ７月28日 | 機材撤収 |

第２次調査

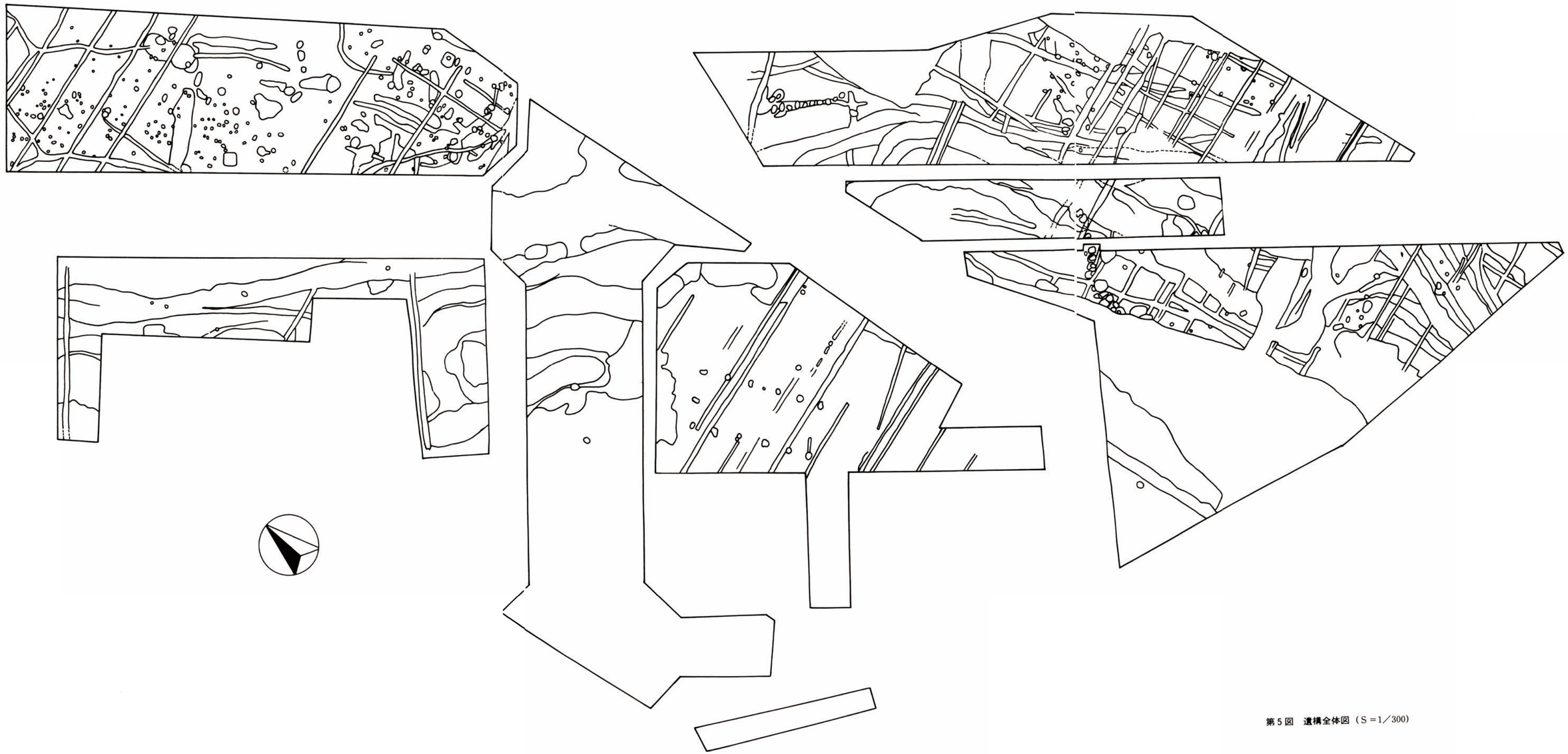
| | |
|---|---|
| 11月８日～10日 | 重機による表土除去作業 |
| 11月13日～ | Ａ区検出、掘削開始（28日より藤江班と合流） |
| 11月29日 | Ｃ区重機により拡張 |
| 12月４日～ | Ｃ区検出、掘削開始 |
| 12月12日 | Ｂ・Ｄ区検出、掘削 |
| 12月19日・20日 | クレーンとラジコンヘリコプターによる航空写真測量 |
| 12月26日 | 機材撤収 |

第３次調査

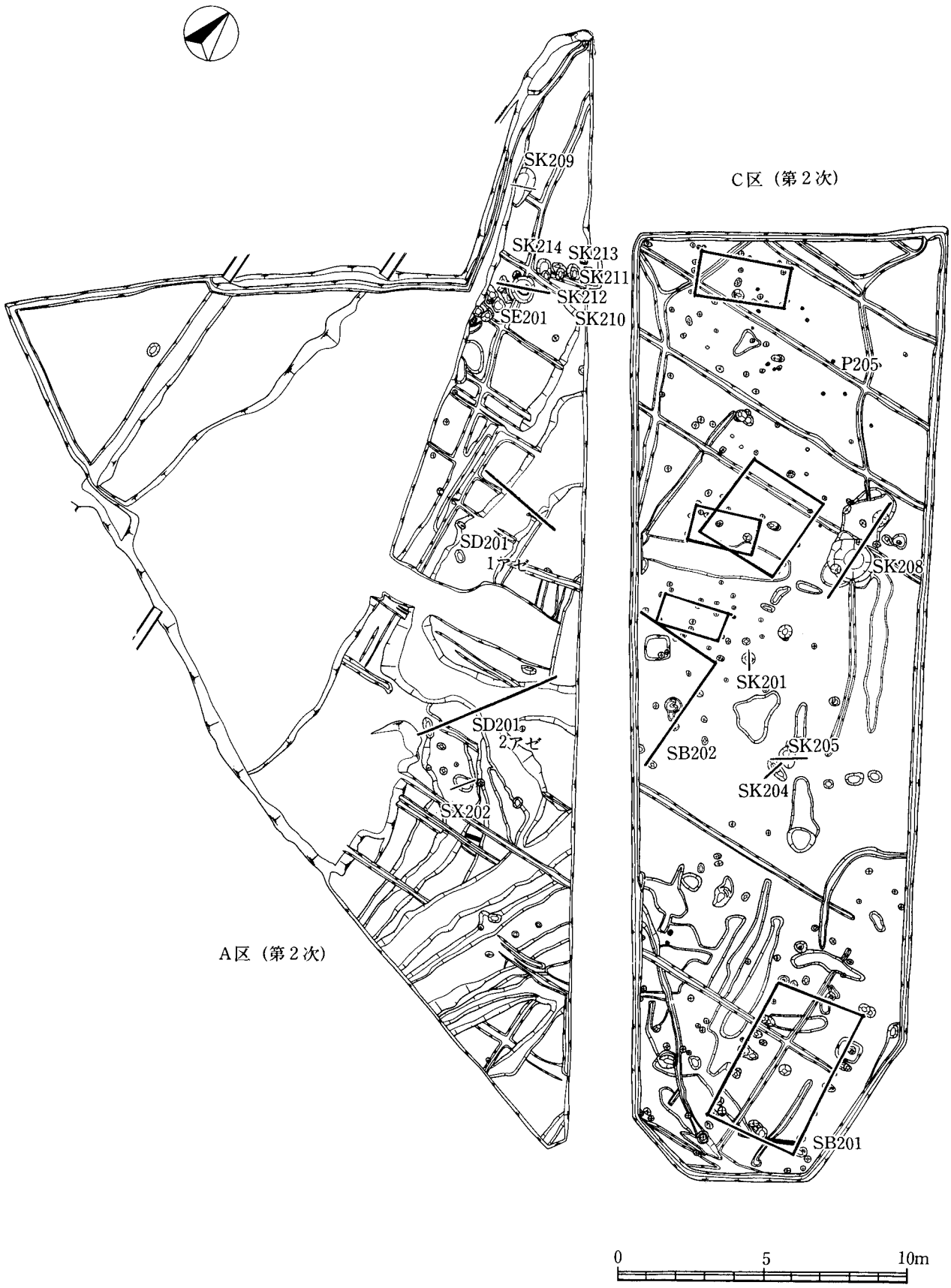
| | |
|---|---|
| ４月15日～17日 | 重機による表土除去作業 |
| ４月24日～ | 作業員をいれての作業開始 |
| ４月25日～ | 調査区設定　Ｅ・Ｇ区検出、掘削開始 |
| ５月８日 | Ｇ区全体写真撮影 |
| ５月15日 | Ｅ区溝掘削開始 |
| ５月27日 | Ｆ区全体写真撮影 |
| （６月５日～11日 | 南新保Ｅ遺跡の準備のため作業中断、６月３日より南新保Ｅ遺跡の調査と並行） |
| ６月17日～18日 | 航空測量のための清掃 |
| ６月19日 | ヘリコプターによる航空写真測量、排土処理 |
| ６月24日 | 機材撤収 |



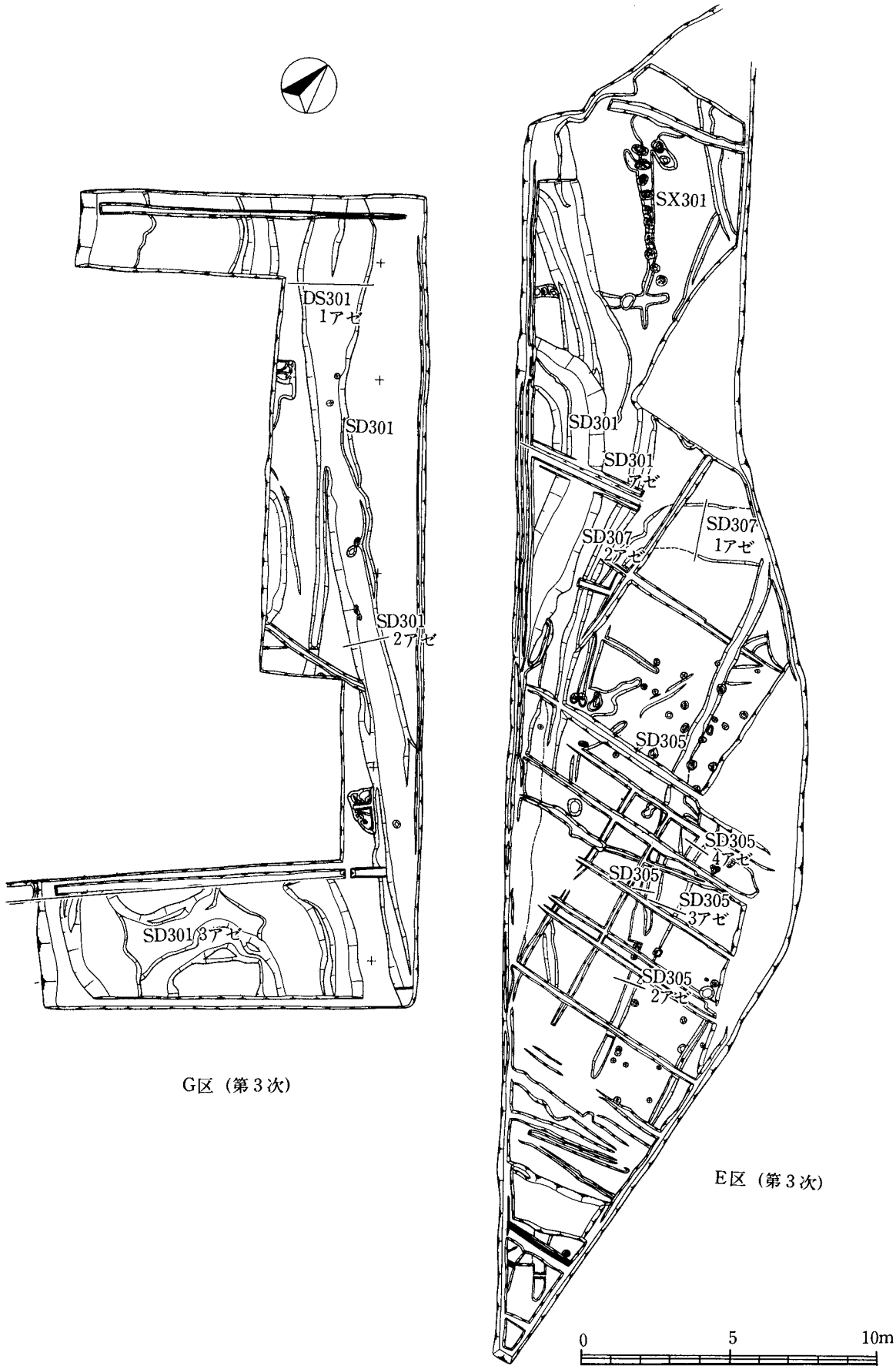

第４図　調査区の配置図



第5図　遺構全体図（S＝1／300）




第６図　A区・C区遺構図（S＝1／200）




第7図　E区・G区遺構図（S＝1／200）

# 第3章　遺　　構

**河　道**（ＳＤ101・ＳＤ201・ＳＤ301）

１次調査から３次調査まで、いずれの調査区からも検出された河道である。自然河道と思われ、途中他の溝と合流・分岐をしながら南北方向に大きく蛇行した流路をとる。幅はもっとも広いところで約５ｍ、深さは0.7ｍ前後となる。上層からは古代の遺物の出土が多く、須恵器杯類、土師器椀類が目立つ。また「天」「河」と書かれた墨書土器も出土した。時期は８世紀後半から９世紀前半までに集中する。９世紀後半から10世紀に下るものもごく少量見られる。また、漆塗皿、上面出土の青磁片など中世の遺物も若干出土した。下層からは、古代と弥生時代の遺物が混在して出土した。上層をはずした段階で下層はかなり様子が変わり、１～２ｍ幅の小さな数条の流路へと姿を変える。ここで見えてきた地山部分より弥生時代中期に該当すると見られる遺構（ＳＸ202）が検出された。弥生時代中期の遺物が大量に出土した最下層は、サブトレンチを入れたところ数カ所から集中して出土したものであり、古代の遺物がいずれの調査区の河道からも普遍的に出土するのに対し、偏りを見せるようである。

**ＳＢ201**

３間×２間。長軸方向はＮ13°Ｅである。桁行きは両端の１間が約2.2ｍで２間目は3.2ｍと大きくなる。対応する桁においてもほぼ同様である。梁行きは１間が約2.3ｍとなる。一部柱穴を共有しており、数回の建て替えが行われていたとみられる。

**ＳＢ202**

確認された規模は、桁行３間（2.2ｍ）・梁行２間（2.3ｍ）をはかる。長軸方向はＮ７°Ｅである。反対側の梁行・桁行ともに調査区外に延びており、建物規模はさらに大きくなる可能性が考えられる。

**ＳＢ203**

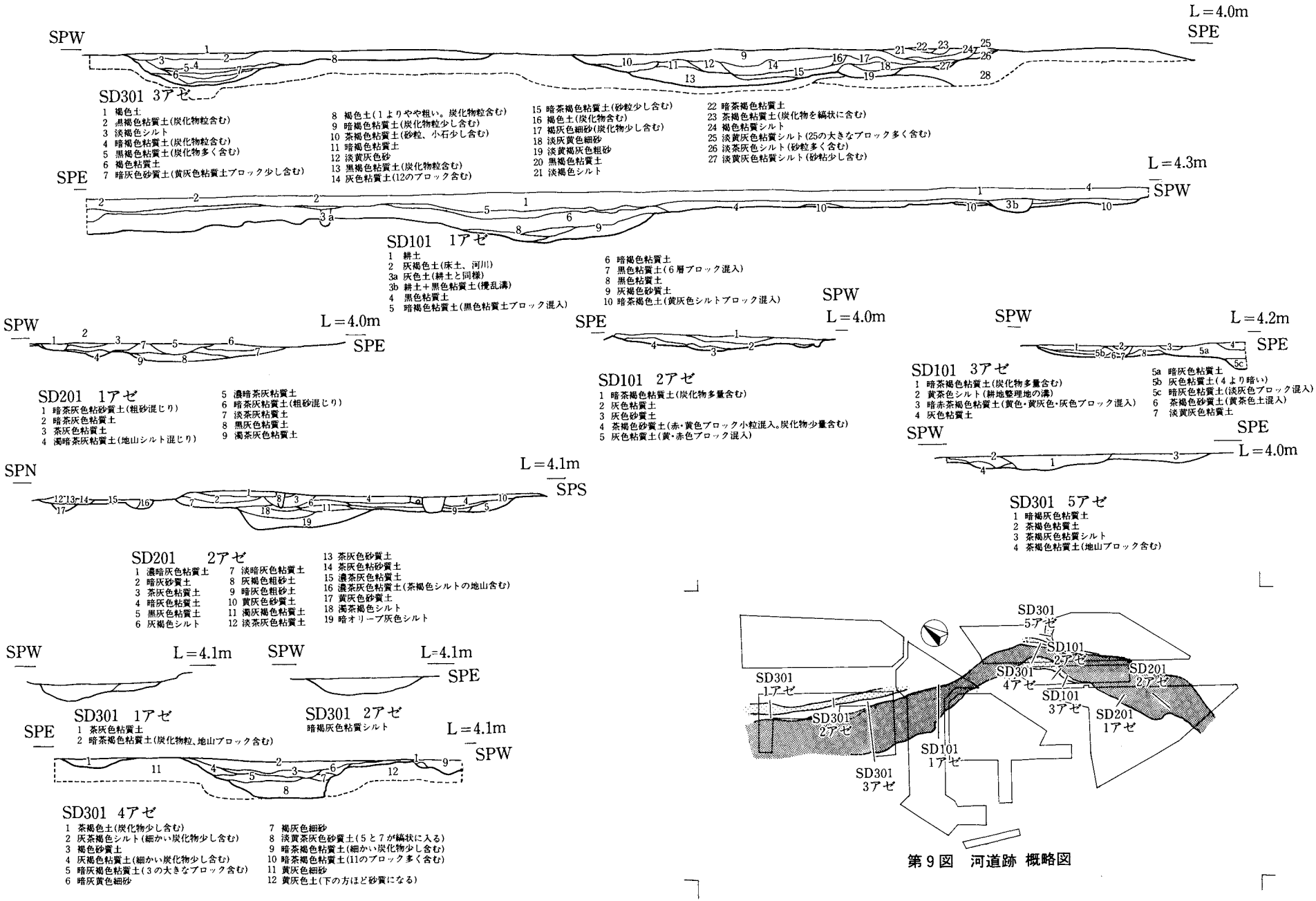
桁行・梁行とも２間の建物跡。隅丸方形の柱穴を持つ。主軸方向はＳ５°Ｅとなる。
他にも多数のピットが周辺にはみられるため、建物がさらに存在していたと見られる。それらはほとんどが１間ないし２間の小規模な建物で（第６図）、長軸方向も前述の建物とは異なる。　（松浦）

**ＳＢ301**

Ｅ区西北寄りで検出された、梁行２間（5.2ｍ）・桁行５間（17.8ｍ）の掘立柱建物跡である。軸方向はＮ15°Ｅである。南列の真中の柱穴は検出されなかった。

Ｐ312から内面黒色土師器片が出土している。底部ヘラ切りで、体部下外側面を回転ヘラ削りするものと思われ、８世紀末～９世紀前半の年代が考えられる。柱穴の掘方は円形で、検出面で掘方と柱材の抜き取り痕跡とで切り合いがみられ、柱材を倒しながら抜き取っている。建て直しを含め、重複する柱穴、建物跡はない。

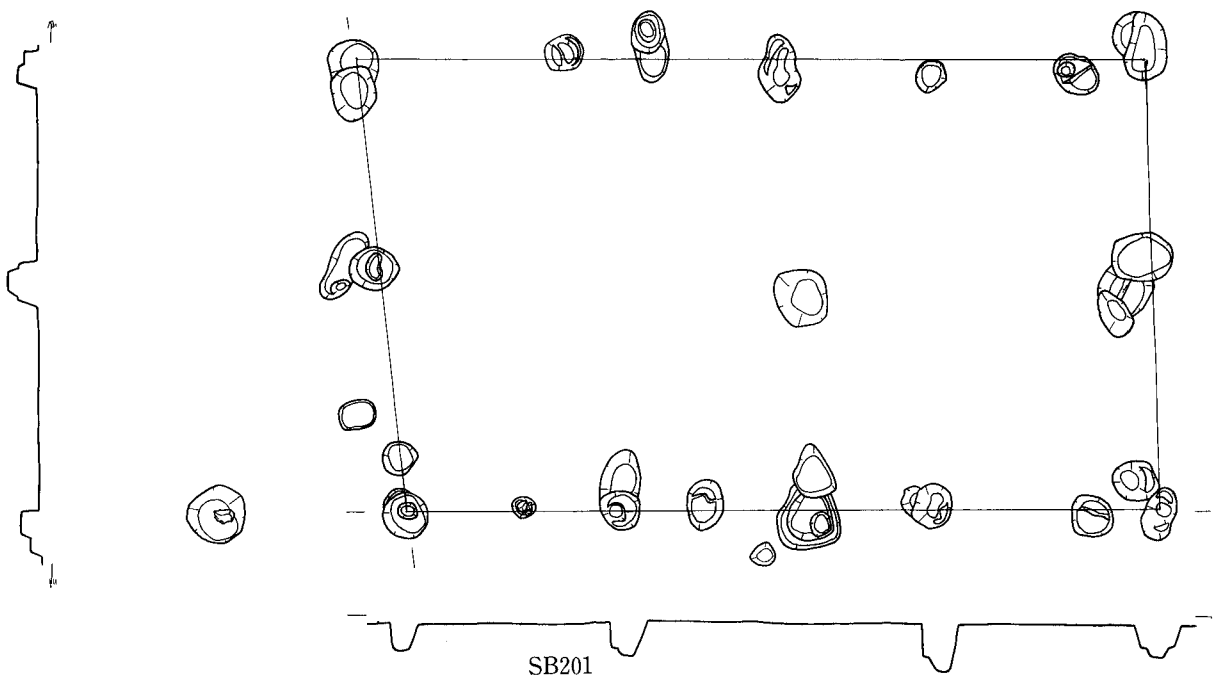
ＳＢ301東列から約３ｍ東に位置するＰ314からは約15㎝程度の石と瓶類の一部と思われる須恵器片が出土している（第12図）。図化できなかったが、胴部２片、頸部１片、底部１片の同一個体と思われる。これらの覆土の上面は厚さ約１㎝の炭化物層が覆っていた。　（熊谷）

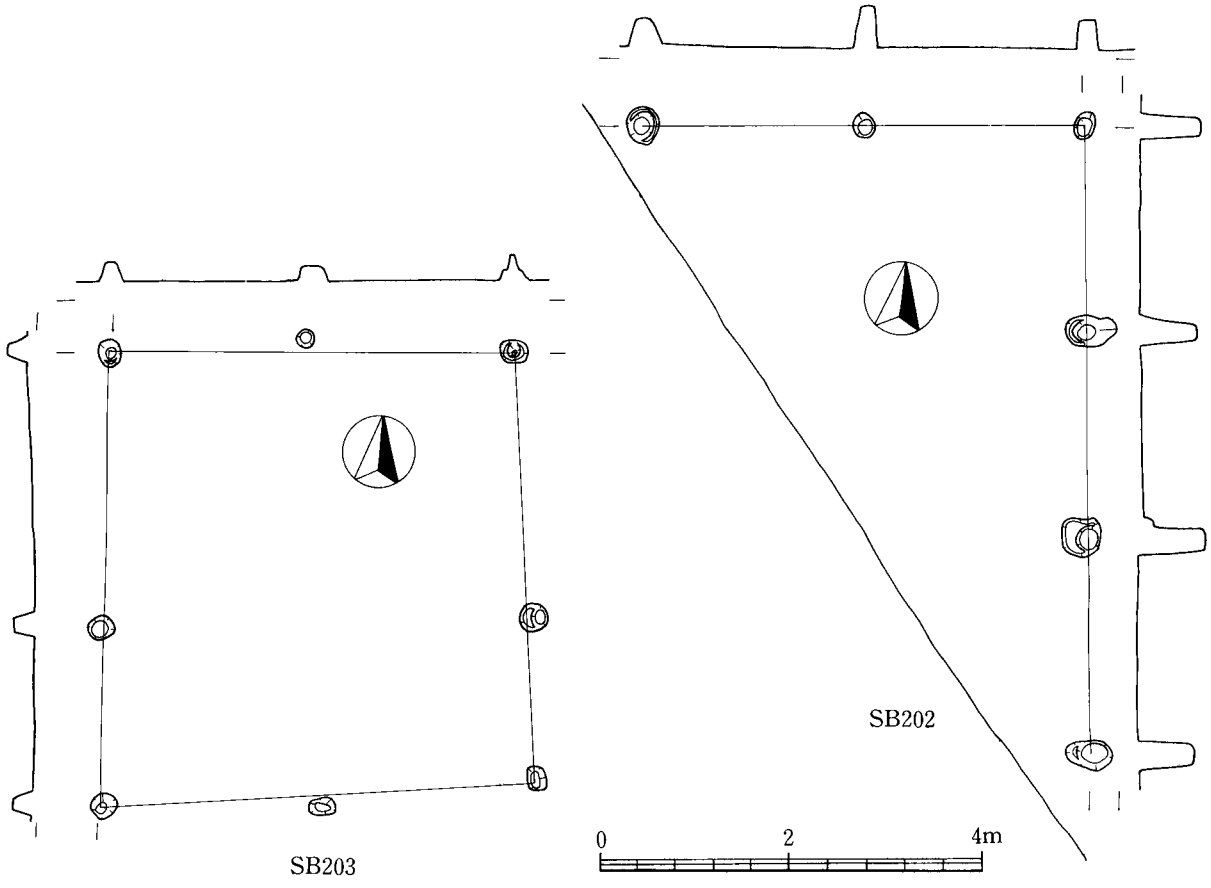



第8図　河道跡 土層断面図（S＝1／80）

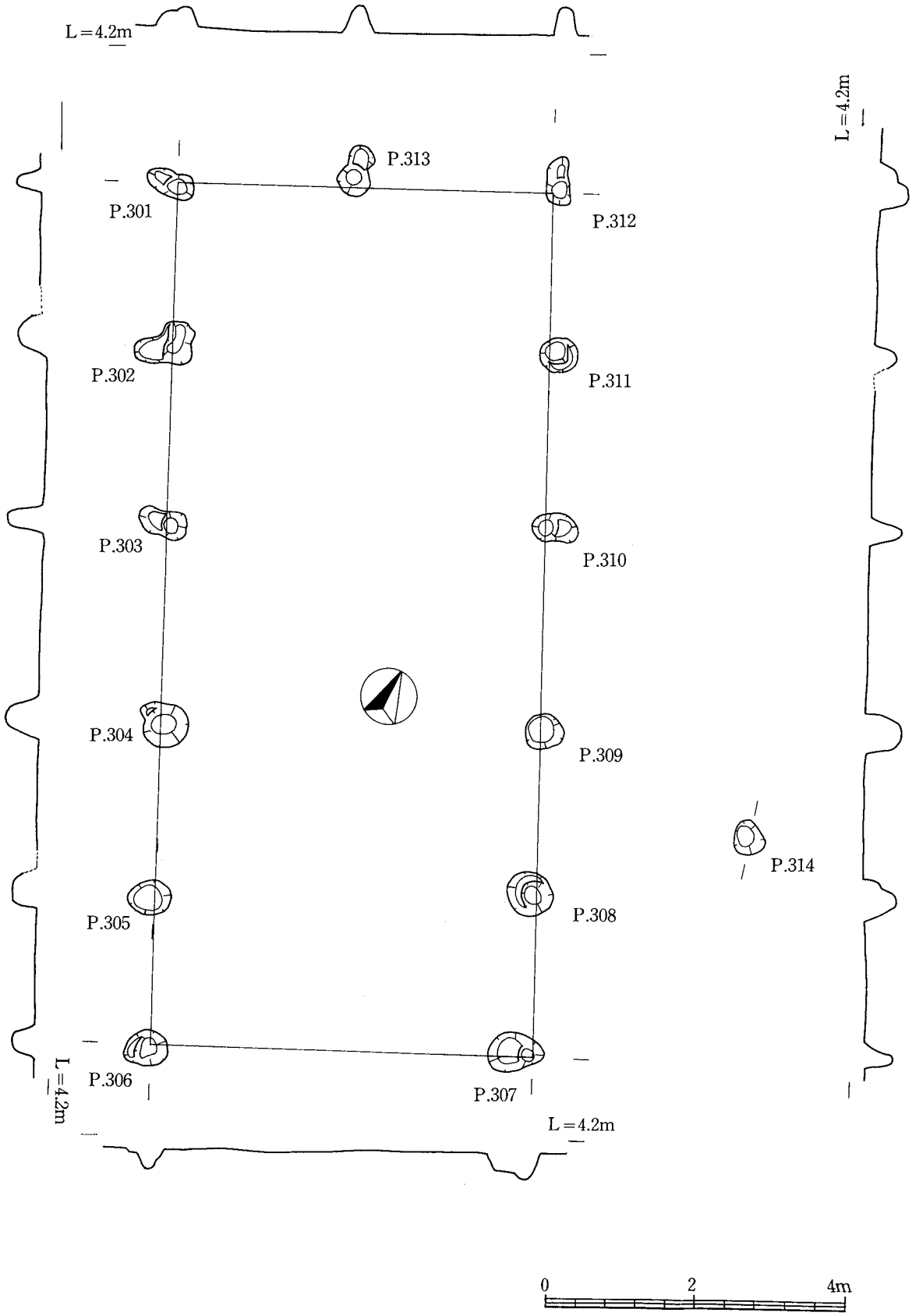



第9図　河道跡 概略図

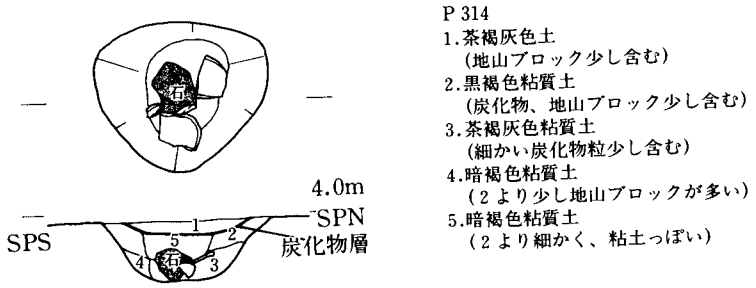



**第10図　C区　SB201. 202. 203.**（S≒1／80）




第11図　F区 SB301 （S＝1／80）




**第12図　P314 平面図・断面図** (S＝1／30)

**ＳＫ201**

直径52㎝・深さ50㎝の平面が円形で、壁が真っ直ぐに立ち上がる土坑。覆土は炭混じり灰色粘土である。

**ＳＫ204**

直径25㎝、深さ50㎝の断面はすり鉢状を呈する。

**ＳＫ205**

平面楕円形の土坑。壁面は南側はなだらかに、北側はほぼ真っ直ぐに立ち上がる。覆土は灰色粘質土を基本とする。覆土から弥生時代中期と予想されるが、遺物等の出土はなく、断定は出来ない。

**ＳＫ209**

近代以降の河道に切られているために全形の把握はできない長軸で約200㎝・深さ20㎝の断面が緩いＵ字状を呈する土坑。９世紀終わり頃の内面黒色土器の皿が出土している。

**ＳＫ210**

直径約1.4m・深さ約0.4m、断面は緩いＵ字状を呈する土坑。

**ＳＫ211～214**

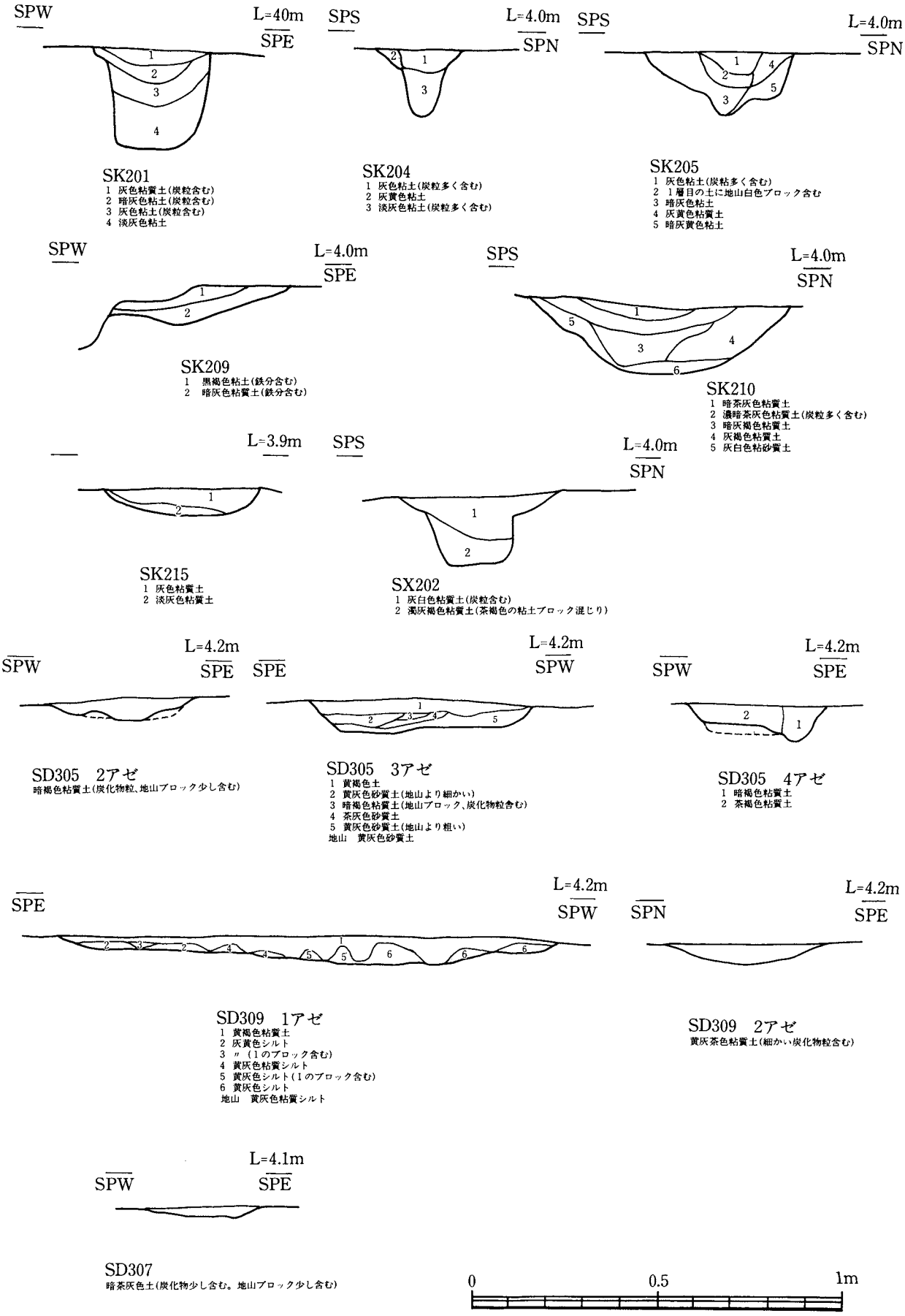
ＳＥ01と共に溝状に連なる土坑群。いずれも覆土は濃暗茶褐色粘質土の単層である。性格は不明。調査中は、平地式建物跡の周溝は土坑が連続し、溝状を呈するものがあるため、周溝の可能性が考えられていた。しかし、東西方向に緩く蛇行して連なっており周溝の様に環状にはならない。出土遺物はＳＫ10よりくるみの殻、焼成の悪い須恵器、ＳＫ11より土師器の椀が出土しており、９世紀後半代に比定される。

**ＳＸ202**

平面形が歪んだ楕円形で直径0.9m・深さ0.35mを計る。ＳＤ201の上層を外したところで検出された。遺構は砂質土中に掘込まれており、わき水も多く非常に崩れやすい。弥生時代中期の条痕文系土器と一緒に炭化した木片とクルミの殻が出土した。　（松浦）

**ＳＤ305**

Ｅ区中央東よりで検出された。２カ所で分岐し、さらに合流して北上する。自然河道跡と平行した流路をとることから、小河川あるいは、ある時期の流路の一部の可能性がある。




第13図　SK・SD 土層図 (S＝1／30)

ＳＤ306

Ｅ区北半、中央北東寄りで検出された小溝である。溝の掘方が逆台形なので人為的なものであると思われる。

ＳＤ307

Ｅ区北半、北東よりでＳＤ306と切り合う。遺物の出土はなく、河道跡との関係も不明である。

（熊谷）

ＳＥ201

掘方を含めた直径が約1.85m、検出面からの深さ約1.54mを計る。掘方は円形を呈し、断面は筒状である。井戸枠が残っており、枠の内径約0.85m、１個体であった刳り抜きの木材を切断し、使用したものと考えられる。井戸枠の下は約５㎜大の小砂利がＵ字状に入る。小砂利層は井戸枠の下部のみにしか見られず、井戸の掘方を掘削した段階で小砂利を敷きつめ、その上に井戸枠の下端を乗せているようである。地山部分は軟質な土のため、井戸枠が沈下するのを防ぎ、同時に浄水の機能も持っていたと考えられる。井戸の底部に小礫を敷く例は羽咋市深江遺跡で、また礫を敷く例は徳前Ｃ遺跡、寺家遺跡砂田地区、戸水Ｃ遺跡など、多くの井戸で見られる。

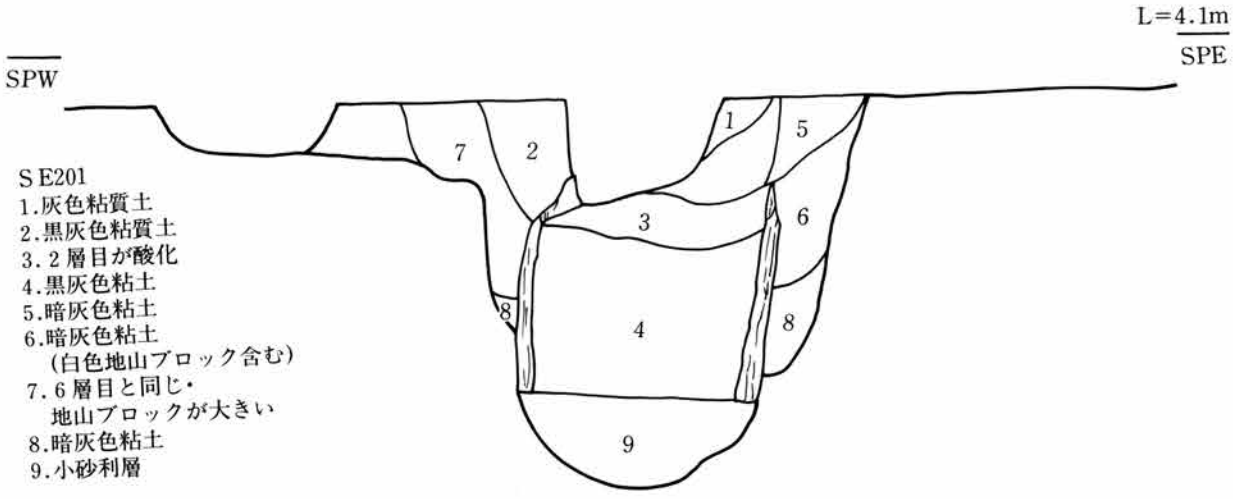
ＳＫ208

径約2.6m、検出面からの深さ約1.8mの不整円形、断面形は擂り鉢型を呈する。調査中かなりの湧き水が見られた。付近に建物跡などがあることから井戸としての使用が考えられる。調査時点で井戸枠は残っていなかったが、覆土の堆積状況から上部の井戸枠は抜き取られ、下部の井戸枠は残されていた可能性が考えられる。粘性の強い覆土でレンズ状に堆積している植物遺体層を２層かむ。須恵器片と内面黒色土器の破片が出土しており、その上限から９世紀後半には埋没していたと思われる。

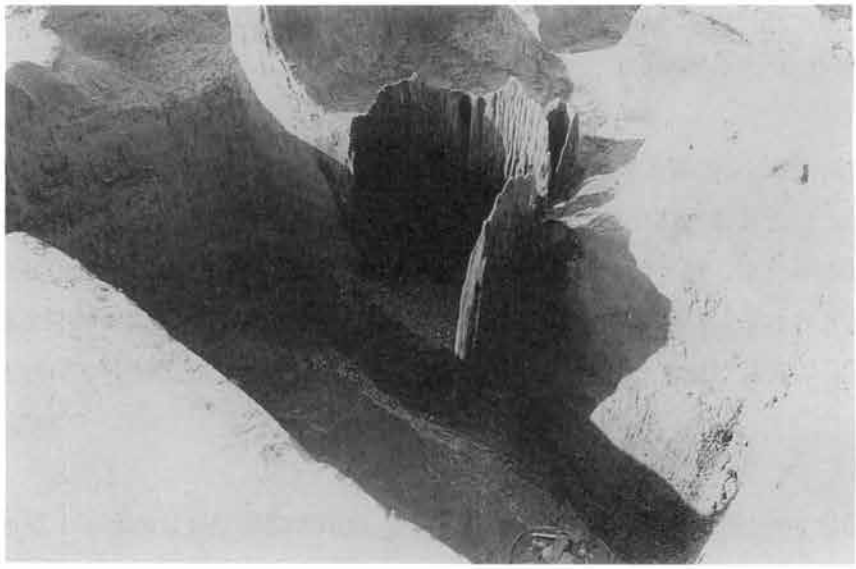
（松浦）

ＳＸ301

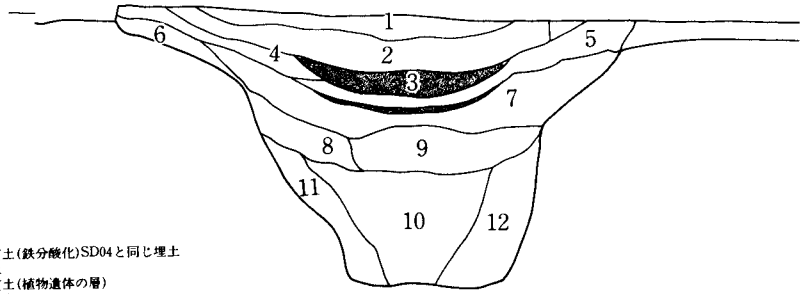
河道（ＳＤ301）の東側、Ｅ区北寄りで検出された。ほぼ等間隔で複数のピットが並び、幅50㎝、深さ20㎝の浅い溝でつながっている。それらのうち４つには、それぞれ２つずつの柱痕跡がある。溝は河道にほぼ平行にのびており、柱痕はその垂直方向に並ぶ。そのほかのピットには柱痕跡は認められなかった。出土遺物は土師器小片が数点のみで、年代は特定できない。２本並べた柱の間に板などを固定して塀としたものの可能性なども考えられるが断定できない。この遺構から東側は攪乱、あるいは調査区外になり、遺構が検出されていないため、性格も不明である。（熊谷）




**第14図　SE201** (S=1／40)



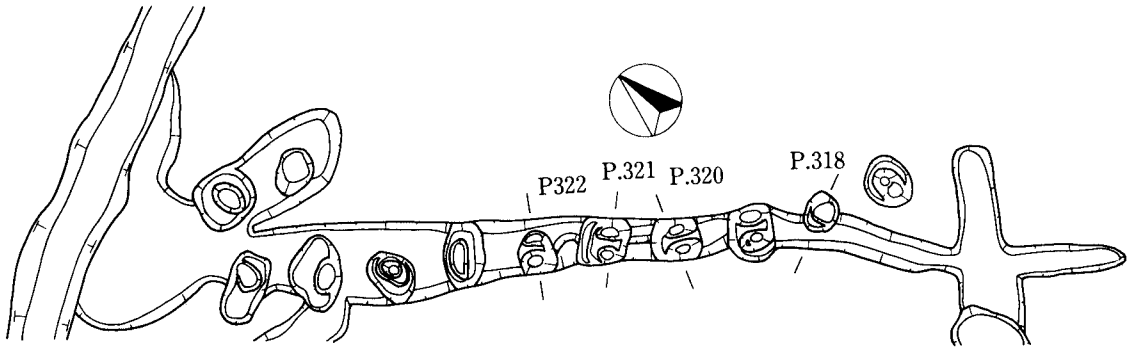
**SE201 たち割り**

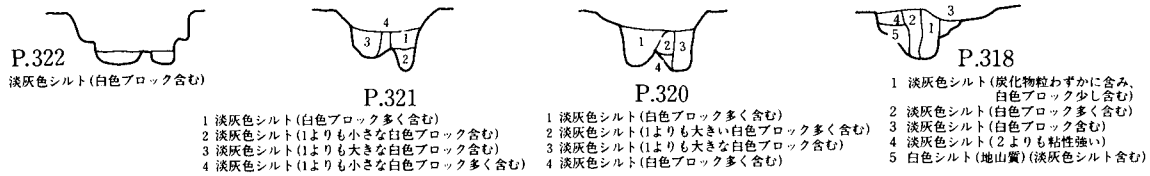



SK 208

1 赤褐色粘質土(鉄分酸化)SD04と同じ埋土
2 灰色粘質土
3 黒褐色粘質土(植物遺体の層)
4 濃灰色粘質土
5 暗灰色粘土
6 黒灰色粘質土(地山白色ブロックを少し含む)
7 淡暗灰色粘土(シルトぽい・鉄分酸化・地山ブロック含む・上面に植物遺体層あり)
8 淡暗灰色粘土
9 暗灰色粘土(シルトぽい)
10 暗灰色粘土
11 暗灰色粘土(地山白色ブロック含む)
12 11層と同じか、やや明るい

**第15図　SK208　(S＝1／50)**




P.322
淡灰色シルト(白色ブロック含む)

P.321
1 淡灰色シルト(白色ブロック多く含む)
2 淡灰色シルト(1よりも小さな白色ブロック含む)
3 淡灰色シルト(1よりも大きな白色ブロック含む)
4 淡灰色シルト(1よりも小さな白色ブロック多く含む)

P.320
1 淡灰色シルト(白色ブロック多く含む)
2 淡灰色シルト(1よりも大きい白色ブロック多く含む)
3 淡灰色シルト(1よりも大きな白色ブロック含む)
4 淡灰色シルト(白色ブロック多く含む)

P.318
1 淡灰色シルト(炭化物粒わずかに含み、白色ブロック少し含む)
2 淡灰色シルト(白色ブロック多く含む)
3 淡灰色シルト(白色ブロック含む)
4 淡灰色シルト(2よりも粘性強い)
5 白色シルト(地山質)(淡灰色シルト含む)

**第16図　SX301 平面図 (S＝1／80)**
**断面図 (S＝1／40)**

# 第4章　遺　　物

## 第1節　弥生時代

出土した土器は、河道最下層からのものが大半を占める。河道以外の遺構からの出土はごく僅かであり、図示出来るものはほとんどなかった。弥生時代中期の遺物が中心となり、後期の高坏が1点混入する。沈線文系土器、条痕文系土器、櫛描文系土器が見られる。器種は壺・甕がほとんどと思われるが、条痕文土器以外は残存率が悪く、器種を特定し得るものは少ない。

（第17図）　1から7までは沈線文系土器である。1は真っ直ぐ外傾する平口縁で外面に菱形になるような沈線を引き、口縁帯として区画するように横位に沈線を施す。内面に指頭圧痕が残る。2は緩く外反する平口縁で外面に山形文を逆さにしたように沈線を何重にも引く。内面はハケ状具による調整が施される。3は口縁内面が肥厚し、口唇部は刺突される。外面はヘラ描きによる沈線を施す。4は外反する平口縁で外面は棒状具による波状文が3条、その下部に縦の沈線が施される。内面はヘラ状具による沈線が10条施される。5は緩く外反する小波状口縁の波頂部分である。内面に1条沈線が入る。6は緩く外反する平口縁。平行沈線を施し、その下部は斜沈線を施す。7は2条の平行沈線を施し、その区画内に細かい縄文を施す。8・9は条痕文系土器である。8は口縁端部を指圧による波状口縁とし、3条の指引き沈線が見られる。内面はナデられる。9は口縁端部を棒状具により斜めに刻む。2条の指引き沈線が見られる。タールが付着しているためか表面は光沢をもつ。10は高坏の脚部と思われる。木目状沈線が巡る。11・12は甕の底部である。11はスダレ状圧痕が見られる。13は口縁部が緩く外傾し、口縁端部を棒状具により斜めに刻みを入れた土器である。指引きの沈線による2条の直線文がみられる。胴部に補修孔が穿たれている。

（第18図）　14は頸部がくびれ、口縁が大きく外反する。2条の指引き沈線による直線文及び波状文が施される。直線文には引き継ぎの盛り上がりが見られる。15は緩いくびれ部から大きく外反する小波状口縁。端部は指圧によって刻まれる。胴部は斜め方向に指引きの沈線が3条施される。16は直線的に立ち上がり口唇部を細い棒状具により刻む甕。内外面ともに条痕調製が行われる。外面は厚く炭化物が付着する。17はまっすぐ立ち上がり、口唇部が若干内湾する。外面は沈線により施文する。内外面ともに朱塗りされ、煤が付着する。器種は不明。18は口縁端部に粘土を張り付け、指圧される。胴部には指引きによる沈線が1条見られる。19は口縁外面を櫛状具により刺突したもの。口縁内面は櫛状具による沈線が施される。20は口縁部が頸部から大きく外反する壺。外面は条痕調整の後に沈線により施文される。

（第19図）　21は大きく外反する口縁を持つ長頸壺である。口縁端部は棒状具により細かい刻み目が施されている。外面は口縁部は縦方向に、頸部は斜に条痕調整する。両者を区画するように横方向に沈線が引かれる。内面は指ナデされる。22は壺の肩部と思われ、幅の広い条痕文、肩部には横方向の直線文、棒状具による波状文が施される。23は受け口状口縁壺。口縁部外面は条痕調整をおこない、口縁部上段には綾杉文を施し、下段は条痕文、下端部は棒状具による波状文となる。内面は条痕文が5条引かれる。24は甕で外面にはハケ調整、底部付近は削りの痕が見られる。外面には全体的に煤が付着する。25は頸部がくびれ、大きく外反する口縁をもつ甕。内外面ともにハケ状具により調整される。頸部から肩部にかけては煤が付かず、そのほかの部位に厚く煤が付着する。26はくびれた頸部よ

り外反して立ち上がる口縁の甕。口縁端部はなでられる。内外面ともハケ調整される。頸部に紐穴と見られる2個2対の穿孔あり。外面は煤が付着する。

（第20図）　27は口縁が大きく外反し端部を棒状具により刻んだ甕。28口縁部はくびれ部より直線的に外傾する。口縁端部は棒状具により刻み目が入る。29の口縁は緩く外反し、口縁端部は棒状具により刻み目が入る。外面には煤が厚く付着する。30・31はほぼ同様の形態であると思われ、水平に外反する口縁部をもち、口縁内面は綾杉文が施される。31の外面はハケ調整後に櫛状具による施文を行う。32は口縁端部に凹線を引き、肩部に貝殻刺突を施す甕。他のものより新しく弥生時代中期末葉と思われる。33は口縁が広く外反する高坏の杯部。口縁部下端に1条の沈線を引く。弥生時代後期と思われる。（松浦）

**参考文献**

石川県立埋蔵文化財センター『下安原海岸遺跡』1997年

金沢市教育委員会『金沢市矢木ジワリ遺跡　矢木ヒガシウラ遺跡』1987年

## 第2節　古代以降

第1次から第3次まで全体を通して、古代の遺物は、パンケース約6箱程度である。河道以外の遺構に伴う遺物の量は少ないので、ここではまとめて報告する。図化したのは31点である。須恵器（34～51）、土師器（52～59）、土錘（60、61）、中世のものは青磁片（63）、漆器皿（62）である。

**須恵器**

（第20、21図）　34、35は杯蓋である。34は扁平な鈕を持ち、口縁部かえりの断面は丸みをもって平たく折りこまれている。35は口縁部がやや内側に折りこまれ、断面が三角形になるものである。鈕部分は欠損している。

36～40は有台杯である。36は、高台着床部分に粘土片が溶着しており、それを削りとった痕跡がみとめられる。38は、外へ開いてまっすぐ立ち上がるが、口縁端部はやや外反する。39は低くて扁平で丸みのある高台を持つ。底部からの立ち上がりも丸みを帯び、体部の器壁は薄いが口縁端部はほんの少し肥厚する。40は体部の回転ナデ調整痕が顕著である。

41～45は無台杯である。41以外は墨書土器である。41はかなり器高が低くなった杯で、体部は外へ開いて立ち上がる。口縁端部が若干玉縁状になる。42は底部へラ切りの後、工具で不定方向に面をならしており、細かい傷状の痕跡が残る。43は底部へラ切りの後、軽くほぼ一定方向にナデ調整を行っている。

46、47は鉄鉢形須恵器である。46は底部に糸切痕が残る。47は底部が欠損して断定できないが、口縁部がやや内湾することから鉄鉢と判断した。

48は短頸壺である。肩部に1㎜幅の沈線2本がめぐる。口縁部は円周の約1／3が残るが、ゆがみがみられる。胴部は回転ナデ調整である。

49は甕口縁部である。甕はほかに数点みられたが、口径が復元できたのはこれのみである。

50は台付瓶、頸部と胴部のみで肩部を欠くが、同一個体と思われる。

51は高坏の脚部である。中程に沈線2本を巡らす。

**土師器**

（第21図）　52は有台椀の底部である。底部内側中央が盛り上がる。53～57は内面黒色処理の土師器で53、54は無台、55、56は有台椀である。53は底部と側面下1／3に回転ヘラケズリを施している。内面のミガキ痕も明瞭である。54は底部回転糸切を施す。55は大型の椀で底部は糸切、高台は貼り付けで高台端部はやや丸い。口縁端部はやや外反する。内面にミガキ痕跡が明瞭に残るほか、外面にも口縁から1／4の位置まで横方向のミガキ痕跡がみられる。56は底部から粘土を引っ張り出して高台を作っている。底部外面に指圧痕が放射状に残る。このような例は越中から北加賀まで分布することが報告されている。図示したもの以外に同様のものが、２点出土している。

57～59は甕である。57は長胴甕である。磨滅が著しいが、わずかに横方向のカキメが残る。58は平底の小甕で底部静止糸切りであるが、59は内外面とも煤の付着が著しく、特に外面の側面下部に炭化物の残存が多い。底部は静止糸切りである。

**土　錘**

（第22図）　２点出土しており、両者とも完形で、摩滅などの痕跡も顕著にはみられない。60は管状細形の土錘である。両端に平らな面を持つ。61は球形の土錘である。指圧痕が多く残る。

**木製品**

（第22図）63は黒色漆器皿で厚さは約１㎜と非常に薄い。河道跡上層からの出土である。

**青　磁**

（第22図）62は青磁碗の破片で蓮弁の浮彫が施される。青磁の小片は他に２点出土しており、いずれも14～15世紀のものと考えられる。

**墨書土器**

（第20図）42～45の墨書土器は「河」が２点、「天」が２点出土している。墨書の位置は、すべて無台杯底部外面である。図化したもの以外にも同じ様に無台杯の外底部に墨書された須恵器片が２点出土している。文字は欠けており、解読できない。800m西に位置する西念・南新保遺跡でも「河」「河戸」「天□」の墨書土器が報告されており、共通するものとして興味深い。　（熊谷）

**参考文献**

北陸古代土器研究会『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』　1997年

北陸古代土器研究会『北陸古代土器研究』第７号　1997年

金沢市教育委員会『西念・南新保遺跡Ⅳ』　1996年

## 第３節　石器・木製品

**石製品**

（第22図）　１～５はいずれも打製石斧である。バチ形と短冊形を呈するものとに分けられる。片面に自然面を残し、刃部よりむしろ側面の調整を丁寧に行っている。６は打製石鏃である。河道最下層より出土した。基部形態は平基、体部形態は三角形を呈する。全長4.2㎝・幅1.4㎝・重量2.4ｇを計る大型品である。

**木製品**

（第23、24図）　1～4はＳＥ201で使用されていた井戸枠である。1と2は下端部同士が接合し同一部材から作られていた。1は全長73.2cm・幅63.1cm・厚み6.8cmを計る。胴部に縦4cm・横1.2cmの長方形の穴が1つ開けられており、中は木材が詰まっている。2は長さ74.5cm・幅63.7cm・厚み7.2cmを計る。一部火熱を受け焦げている（スクリーントーン部分）。1と2は下端部断面に切断時の鑿等の加工痕が明瞭に残る。3は長さ66cm・幅45.2cm・厚み6.8cm。4は長さ71.9cm・幅25.6cm・厚み5.0cm。この2つはいずれとも接合はしなかった。使用木材は針葉樹とみられる。

井戸枠の1と2を接合すると全長約150cmにもなる。この材は単なる丸太刳り抜きではなく、1の長方形の穿孔は、準構造船の船底部と舷側板を接合するために開けられた柄穴の可能性も考えられる。滋賀県守山市下長遺跡出土の準構造船の場合柄穴が約30cm、大阪府八尾市久宝寺遺跡出土の準構造船の柄穴は40～50cm間隔で開けられたものが複数個みられる。当遺跡のものは1つしか確認出来ておらず、舟材かどうか確証は出来ない。ただ井戸のそばを流れる自然河道は水路としての使用が考えられるため運搬等に使用した船を井戸枠として再利用した可能性はあり得る。船材を井戸に転用した例としては県内では小松市松梨遺跡があげられる。船の舳先と艫が利用される。船の胴体部分を使用した例としては大阪府八尾市萱振遺跡があげられ、古墳時代に廃棄されたものを奈良時代に井戸側として再利用したとされる。

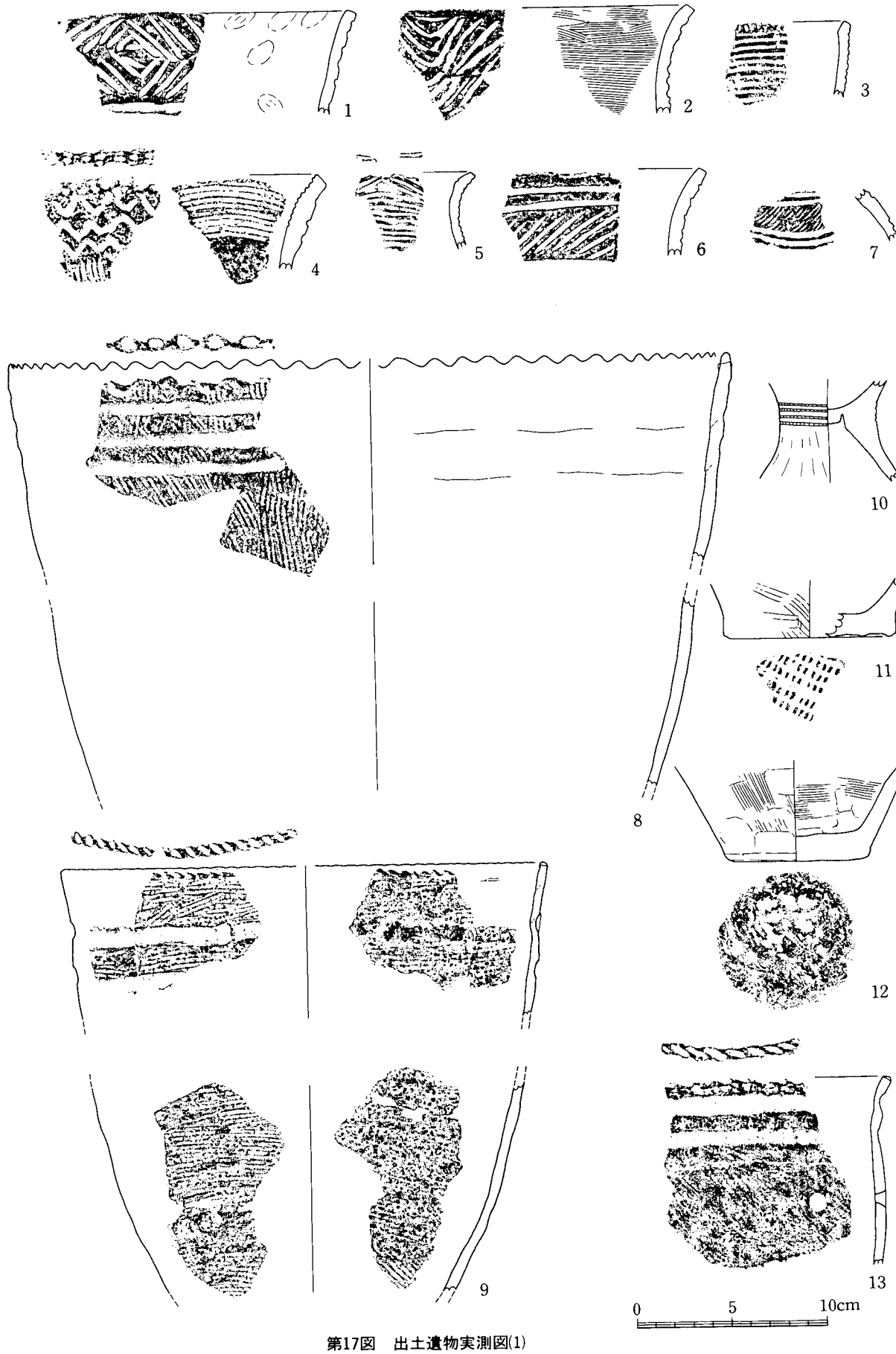
5はＣ区のＰ205より検出された。柱根かと思われたが対応する柱穴等は確認できない。下半部は抉り込まれており、木材の沈下を防ぐなどの目的と思われる。

（第22図）　63はＳＥ201より出土した幅1.2cm・長さ15cm・厚さ0.2cmの木製品。同様のものが何点か出土しておりそのうちの最も残りのよいものを図示した。用途は不明であるが、複数個で使用したと考えられる。　（松浦）

**参考文献**

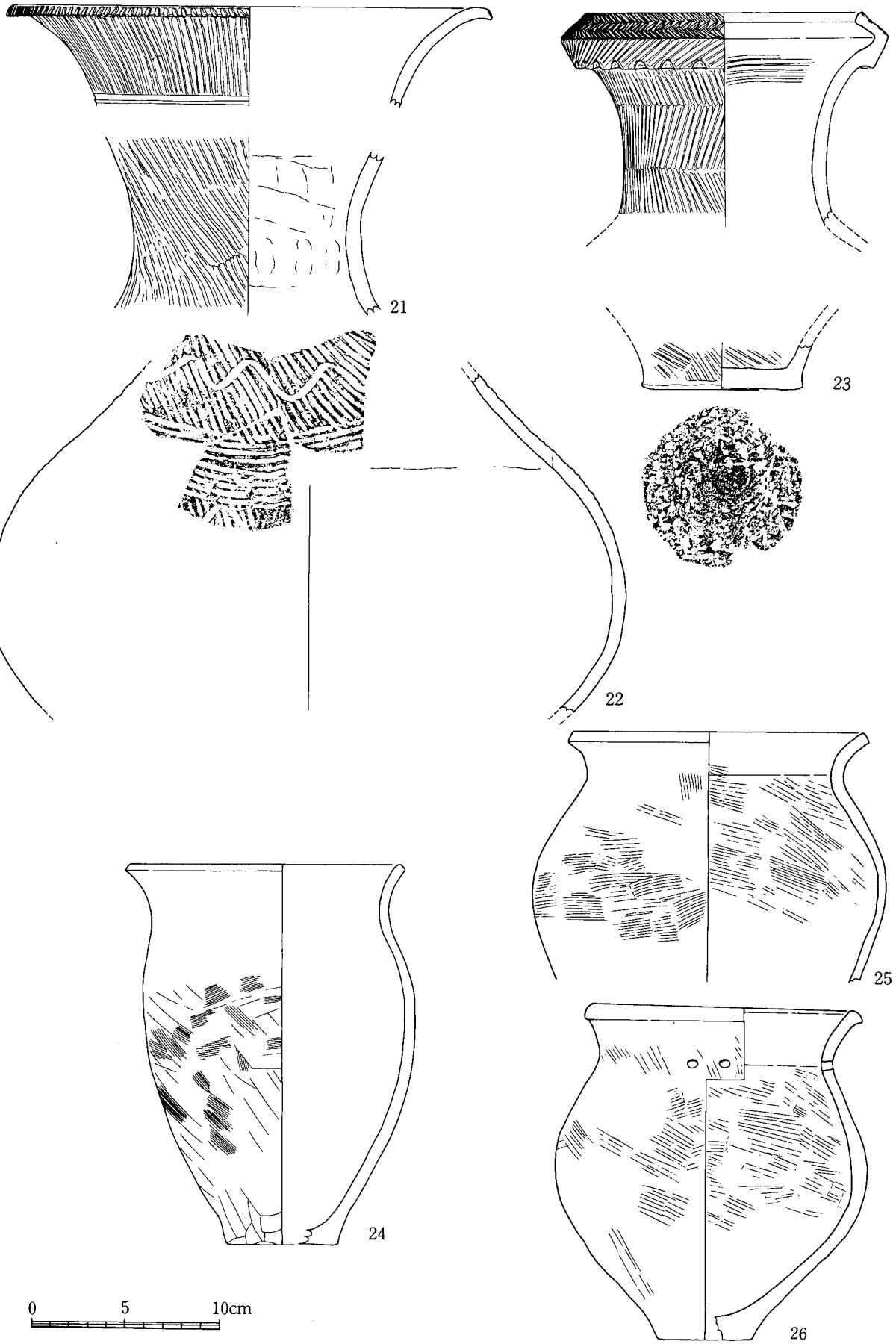
小松市教育委員会『松梨遺跡』1994年

辻尾榮市「刳舟に関する形式形態の諸問題」『郵政考古紀要』ＸⅣ　大阪・郵政考古学会　1989年

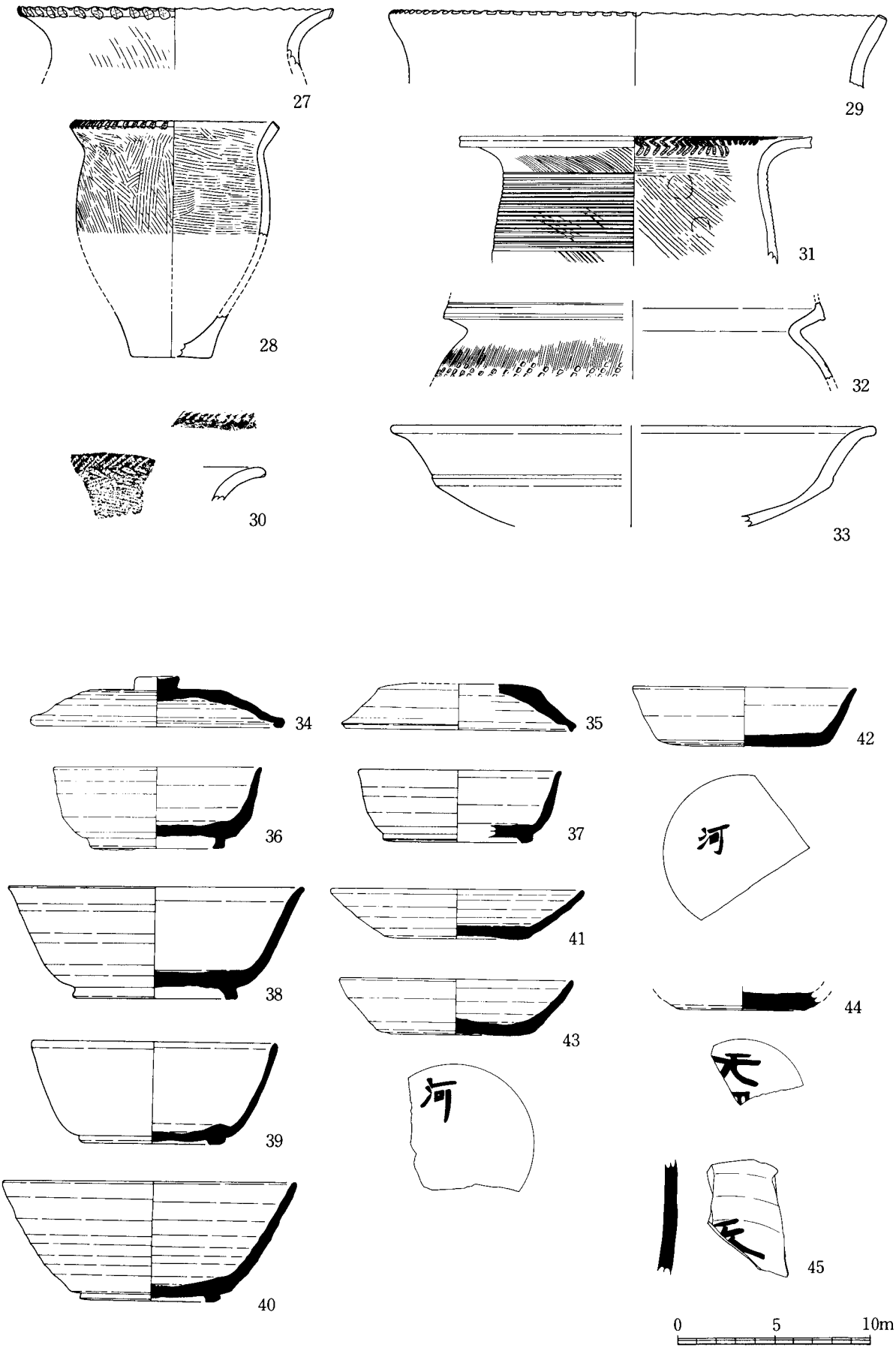



第17図　出土遺物実測図(1)

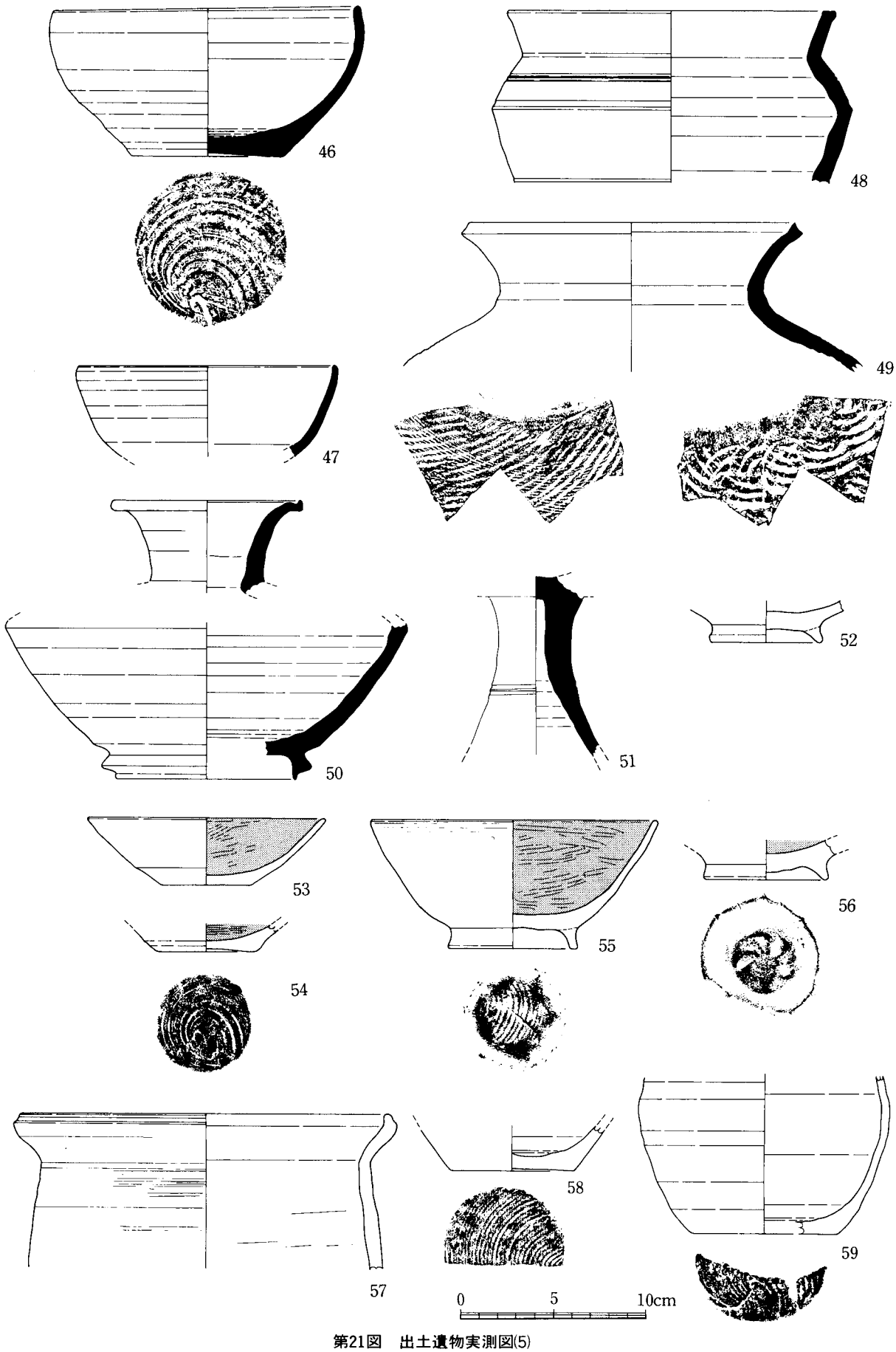
第18図　出土遺物実測図(2)



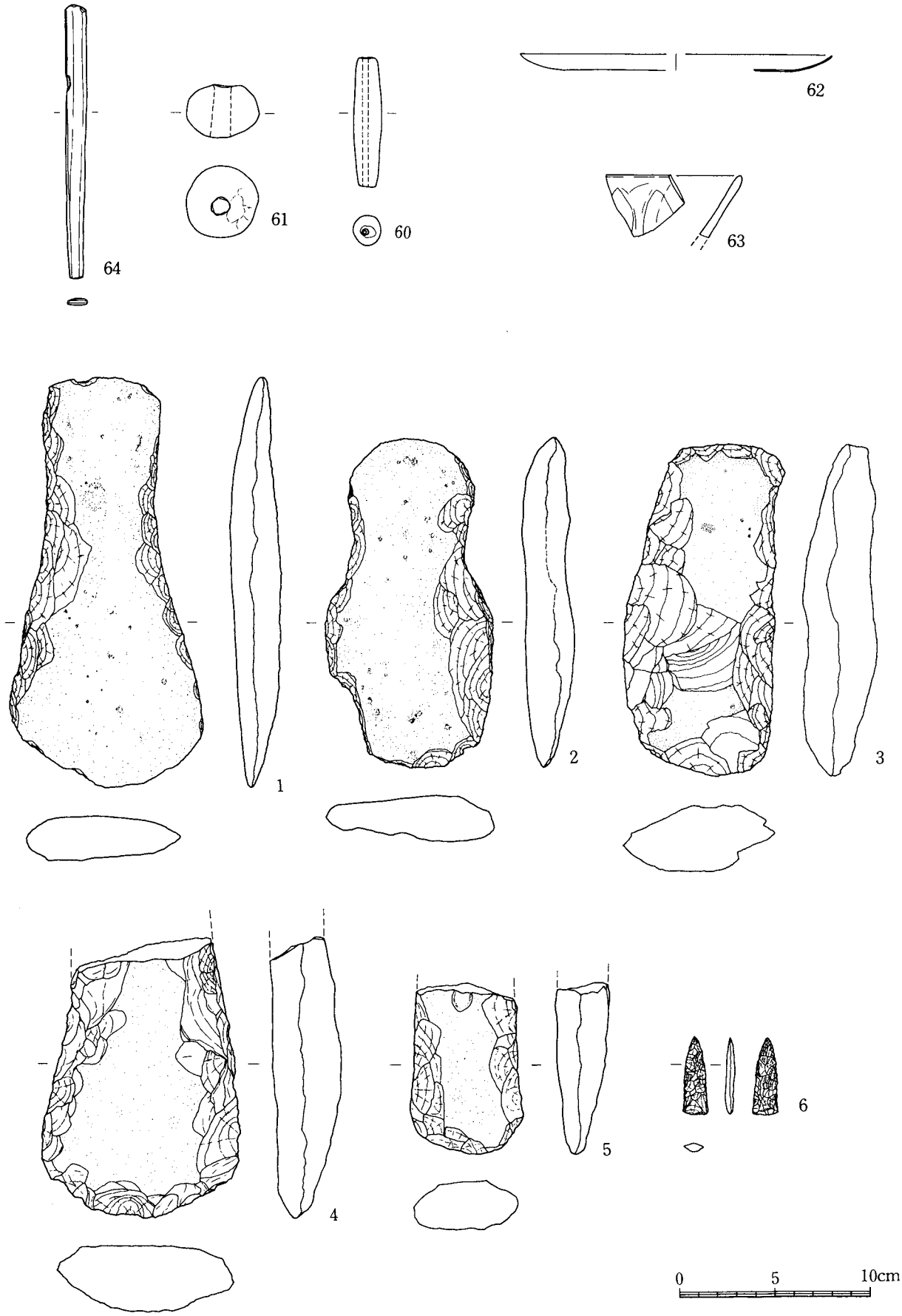

第19図　出土遺物実測図(3)



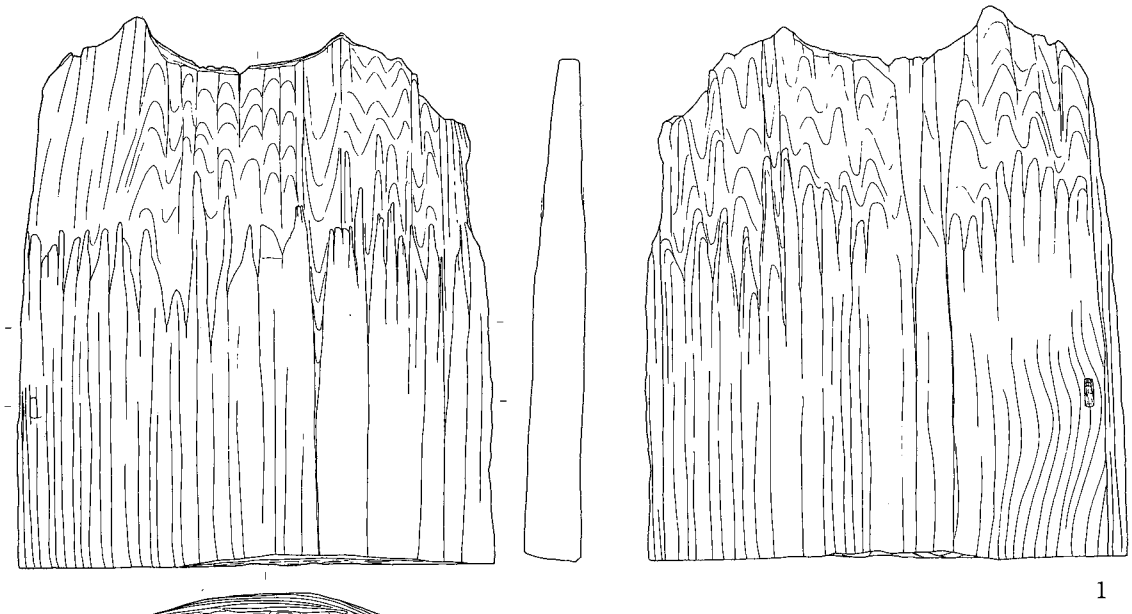

第20図　出土遺物実測図(4)



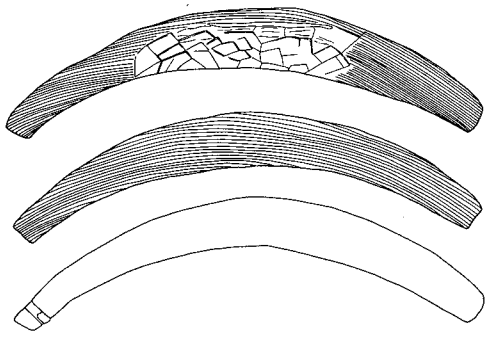

第21図　出土遺物実測図(5)

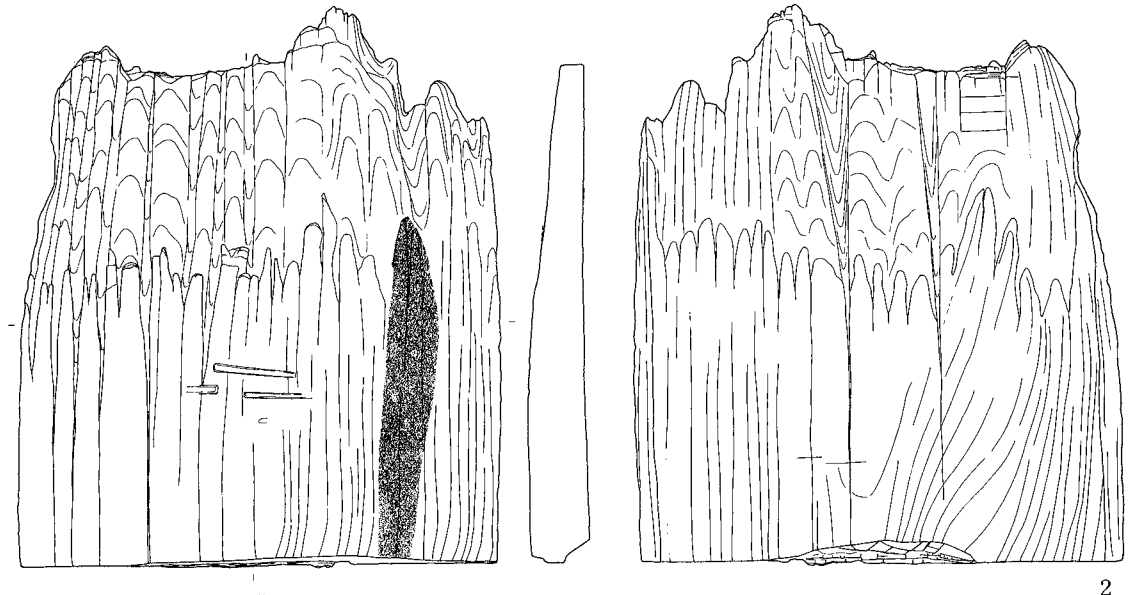



第22図　出土遺物実測図(6)

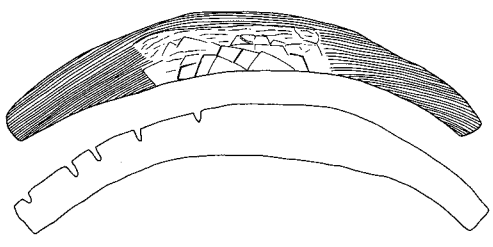


1

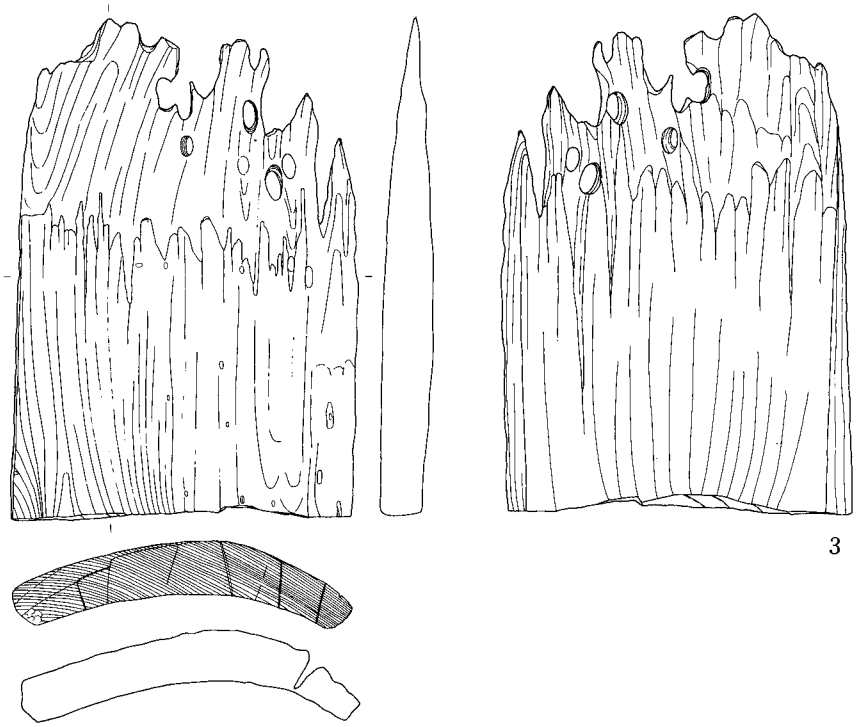


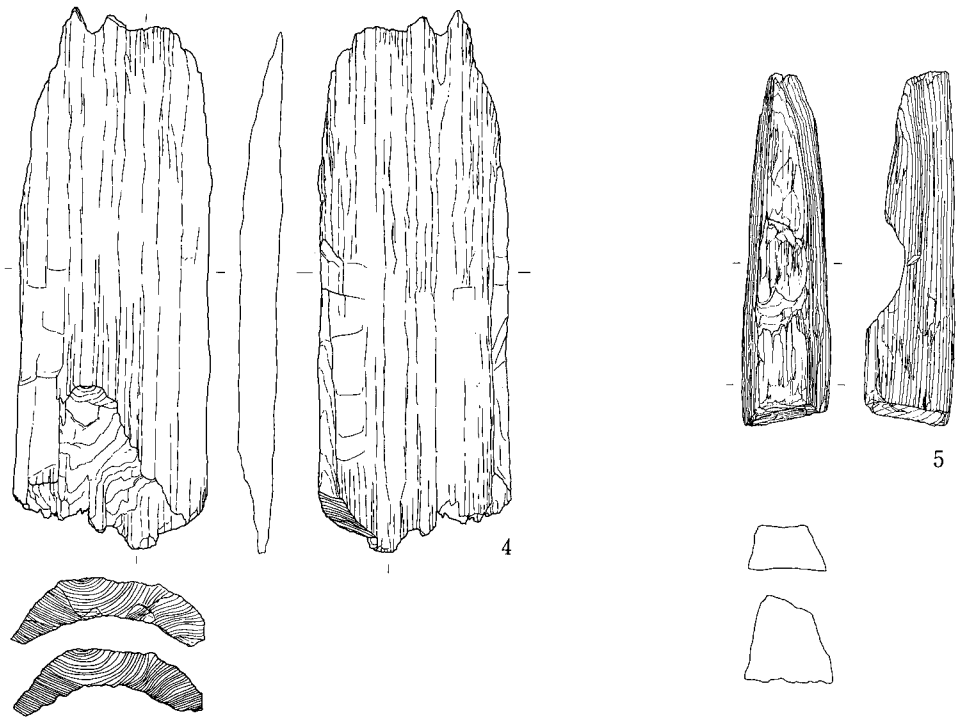


2



第23図　出土遺物実測図(7)（S＝1／10)




第24図　出土遺物実測図(8)（S＝1／10）

| | 出土地 | 器種 | 法量 | 調整 | 色調 | 胎土 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | SD201 中最下層 | | | 外 沈線<br>内 指頭圧 | 茶褐<br>黄橙 | 砂礫S少 | 煤 |
| 2 | SD201 最下層 | | | 外 沈線<br>内 ハケ | 灰黄褐<br>黄灰 | 砂礫S少 | |
| 3 | SD201 上層 | | | 外 沈線 口端キザミ<br>内 ナデ | 黒褐<br>黒褐 | 砂礫M少 | 煤 |
| 4 | SD201 下層 | | | 外 沈線 口端キザミ<br>内 沈線 | 浅黄<br>浅黄 | 砂礫L多 | |
| 5 | SD201 下層 | | | 外 沈線<br>内 沈線 | 灰黄<br>灰黄褐 | 砂礫S | |
| 6 | SD201 最下層 | | | 外 沈線<br>内 | 黄褐<br>黄橙 | 砂礫MS少 | 煤 |
| 7 | SD201 最下層 | | | 外 沈線 縄文充填 | 茶灰 | 砂礫L少 | 外煤 内炭化物厚 |
| 8 | SD201 最下層 | 甕 | 口38.2 | 外 条痕 指沈線 口端キザミ<br>内 ナデ | 灰黄<br>灰黄 | 砂礫L少 海綿 | 煤 |
| 9 | SD201 最下層 | 甕 | 口25.6 | 外 条痕 指沈線 口端キザミ<br>内 条痕 | 黄灰<br>浅黄 | 砂礫L多 海綿 | 煤 |
| 10 | SD201 上層 | 高坏脚 | | 沈線 | 黄褐 | 砂礫M少S多 | |
| 11 | SD201 | 底部 | 底 9.0 | 外<br>内 | 浅黄<br>浅黄 | 砂礫M多 海綿 | スダレ状圧痕 |
| 12 | SD201 最下層 | 底部 | 底 7.2 | 外 ハケ<br>内 ハケ ナデ | 黄橙<br>暗灰黄 | 砂礫LM多 | 圧痕 |
| 13 | SD201 下層 | 甕 | | 外 条痕 指沈線 口端キザミ<br>内 | 浅黄橙<br>浅黄橙 | 砂礫M多 海綿 | 穿孔 |
| 14 | SD201 下層 | 甕 | | 外 条痕 指沈線<br>内 ナデ | 黄褐<br>黄褐 | 砂礫L多 海綿 | 煤 |
| 15 | SD201 下層 | 甕 | 口33.4 | 外 条痕 指沈線 口端キザミ<br>内 | 淡黄<br>淡黄 | 砂礫L少 焼土 | 煤 |
| 16 | SD201 最下層 | 甕 | | 外 条痕 口端キザミ<br>内 条痕 | <br>黄灰 | 砂礫L少 | 炭化物厚く付着 |
| 17 | SD201 最下層 | | 口 8.5 | 外 沈線<br>内 ナデ | 黄橙<br>黄橙 | 砂礫S少 海綿 | 煤 赤彩<br>赤彩 |
| 18 | SD201 下層 | 壺 | | 外 指沈線<br>内 条痕 | 淡黄<br>淡黄 | 砂礫S少 海綿 | |
| 19 | SX303 上層 | 壺 | | 外 刺突 口端キザミ<br>内 沈線 | 淡黄<br>淡黄 | 砂礫S多 | |
| 20 | SD201 最下層 | 甕 | | 外 条痕 沈線<br>内 | 灰黄<br>灰黄 | 砂礫L少 | 煤 |
| 21 | SD201 下層 | 壺 | 口25.2 | 外 条痕<br>内 | 淡黄灰 | 砂礫L多 | |
| 22 | SD201 最下層 | 壺 | 胴33.8 | 外 条痕 沈線<br>内 | 灰黄<br>淡黄 | 砂礫LM少 | |
| 23 | SD201 下層 | 壺 | 口14.5 | 外<br>内 沈線 | 灰白<br>灰白 | 砂礫L多 焼土 | |
| 24 | SD201 | 甕 | 口14.8 胴14.5<br>底 6 器20.3 | 外 ハケ<br>内 | 褐灰 | 砂礫L多 | 外煤 |
| 25 | SD201 | 甕 | 口14.1 胴18.6 | 外 ハケ<br>内 ハケ | 茶灰 | 砂礫M少 | 外煤 |
| 26 | SD201 下層 | 甕 | 口13.5 胴16.5<br>底 5 器17.8 | 外 ハケ<br>内 ハケ | 褐灰 | 砂礫M少 | 外煤 2個1対穿孔 |
| 27 | SD201 最下層 | 甕 | 口16.3 | 外 ハケ 口端キザミ<br>内 | 黄橙<br>黄橙 | 砂礫L少 | 炭化物<br>煤 |
| 28 | SD201 下層 | 甕 | 口10.3 胴10.2<br>底 4.0 | 外 ハケ 口端キザミ<br>内 ハケ | 淡黄<br>淡黄 | | |
| 29 | SD201 下層 | 甕 | 口25.4 | 外 口端キザミ<br>内 | 黄褐<br>黄灰 | 砂礫MS少 | 煤 |
| 30 | SD201 下層 | 甕 | | 外 条痕 ハケ 口端キザミ<br>内 ハケ 綾杉文 | 灰黄<br>灰白 | 砂礫L少 | |
| 31 | SD201 下層 | 甕 | 口18.4 | 外 ハケ<br>内 綾杉文 ハケ | 黄橙 | 砂礫S少 焼土 | |
| 32 | SD201 下層 | 甕 | | 外 刺突ハケ 口端凹線<br>内 | 淡黄<br>淡黄 | | |
| 33 | G区SD304 | 高坏 | 口25.4 | 外 沈線 | 淡黄<br>淡黄 | 砂礫M少 焼土 | |
| | 北調 | 底部 | | | 暗赤褐 | 砂礫S少 海綿<br>焼土 | |

| No. | 区 | 出土地 | 器種 | 法量 | 調整 | 色調 | 胎土 | 焼成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 34 | C | P243 | 須恵器<br>杯蓋 | 口13.4 鈕 2.4<br>高 2.7 | 天頂部ヘラ切り<br>後ナデ | 灰白色 | やや密。砂粒少、<br>2～4㎜礫多。 | 良 | |
| 35 | A | SD201（河） | 須恵器<br>杯蓋 | 口11.9 | 天頂部ヘラ切り<br>後ナデ | 灰黄色 | やや密。砂粒少、<br>小礫少。 | やや<br>不良 | |
| 36 | 南調 | | 須恵器<br>有台杯 | 口10.8 台 5.7<br>高 4.4 | 底部ヘラ切り後<br>ナデ | 灰色 | やや粗。砂粒多、<br>小礫少。 | 良 | |
| 37 | C | P234 | 須恵器<br>有台杯 | 口10.6 台 8.0<br>高 3.8 | 底部ヘラ切り | 灰色 | 密。砂粒極少。 | 良 | |
| 38 | C | SK208 | 須恵器<br>有台杯 | 口15.4 台 9.5<br>高 5.9 | 底部ヘラ切り | 灰色 | やや粗。砂少、1<br>㎜礫少。 | 良 | 鉱物溶着。<br>（1～5㎜） |
| 39 | 北調 | 黒色土溝<br>ほか（河） | 須恵器<br>有台杯 | 口12.8 台 7.6<br>高 5.4 | 底部ヘラ切り | 褐灰色 | やや密。砂極少、<br>1㎜礫少。 | 良 | |
| 40 | A | SK211<br>上面 | 須恵器<br>有台杯 | 口15.2 台 7.0<br>高 6.7 | 底部ヘラ切り | 灰白色 | やや密。砂粒少、<br>1～2㎜礫少。 | 良 | |
| 41 | 南調 | SD105（河） | 須恵器<br>無台杯 | 口13.4 底 6.6<br>高 2.6 | 底部ヘラ切り | 灰色 | 密。砂粒少。 | 良 | |
| 42 | A | SD201<br>6区（河） | 須恵器<br>無台杯 | 口12.4 底 8.4<br>高 2.9 | 底部ヘラ切り後<br>工具による粗い<br>ナデ | 灰白色 | やや密。砂粒少、<br>2～3㎜礫少。 | 良 | 「河」墨書 |
| 43 | 北調 | | 須恵器<br>無台杯 | 口12.3 底 7.6<br>高 3.1 | 底部ヘラ切り後<br>軽い横ナデ | 灰白色 | 密。砂粒少。 | やや<br>良 | 「河」墨書 |
| 44 | F | | 須恵器<br>無台杯 | 底 6.6 | 底部ヘラ切り後<br>ナデ | 灰白色 | やや密。砂粒極<br>少。 | 良 | 「天？□」墨書<br>底部破片 |
| 45 | A | SD201南<br>上面（河） | 須恵器<br>無台杯？ | | 底部ヘラ切り | 灰白色 | 密。砂粒少。 | 良 | 「天？」墨書<br>底部破片 |
| 46 | G | SD301<br>上面（河） | 須恵器<br>鉄鉢 | 口16.4 底 8.1<br>高 8.1 | 底部糸切 | 灰色 | やや粗。砂粒多、<br>1～5㎜礫多。 | 良 | |
| 47 | D | SD301（河） | 須恵器<br>鉄鉢？ | 口13.6 | | 灰色 | 密。砂粒少。 | 良 | |
| 48 | A | SD201<br>5区上層（河） | 須恵器<br>短頸壷 | 口17.4<br>胴19.2 | | 灰色 | やや密。砂粒多。 | 良 | |
| 49 | A | SD201<br>6区上面（河） | 須恵器<br>甕 | 口17.4 | | 灰色 | 粗。砂粒極多。<br>1～4㎜礫多。 | 良 | |
| 50 | 北調 | SD101（河） | 須恵器<br>台付瓶 | 口10.0 台 9.4<br>胴21.6 | | にぶい黄橙色 | やや密。砂粒少、<br>1～5㎜礫多。 | 良 | 肩部欠損 |
| 51 | 南調 | | 須恵器<br>高杯 | （残高 9.7） | | 灰色 | 密。砂粒少。 | 良 | 脚部のみ残存 |
| 52 | E | SD301<br>上面（河） | 土師器<br>有台椀 | 台 6.0 | 貼付高台 | にぶい橙色 | やや密。微細雲母<br>片極少、微細骨針<br>極少。 | 良 | 底部のみ残存 |
| 53 | E | SD301<br>上層（河） | 土師器<br>無台椀 | 口12.5 底 4.8<br>高 3.6 | 内黒。底部、下<br>外側面1／3ヘラ<br>削り | 外：淡黄色<br>内：黒色 | 密。細砂粒少、微<br>細雲母片少、微細<br>骨針少。 | 良 | |
| 54 | A | SD201<br>1区（河） | 土師器<br>無台椀 | 底 5.4 | 内黒。底部糸<br>切、内面ミガキ | 外：浅黄色<br>内：黒色 | やや粗。砂粒極<br>少、微細雲母片<br>少。 | やや<br>不良 | 底部のみ残存 |
| 55 | 南調 | SD101（河） | 土師器<br>有台椀 | 口15.3 底 7.0<br>高 6.9 | 内黒。内面全、<br>外面上1／4ミガ<br>キ、底部糸切、<br>貼付高台 | 外：にぶい橙色<br>内：黒色 | 密。砂粒極少、微<br>細雲母片多。 | 良 | |
| 56 | E | | 土師器<br>有台椀 | 台 6.4 | 内黒。菊花状か<br>き出し高台 | 外：淡黄色<br>内：黒色 | 粗。砂粒極多、微<br>細雲母片多、2㎜<br>礫極少。 | やや<br>不良 | |
| 57 | 南調 | SD101（河） | 土師器<br>甕 | 口 9.6 | | 浅黄橙色 | やや粗。砂粒少、<br>雲母片少、2㎜礫<br>極少。 | やや<br>不良 | |
| 58 | 南調 | | 土師器<br>甕 | 底 6.6 | 底部糸切 | 淡橙色 | やや粗。砂粒極<br>少、骨針極少。 | やや<br>不良 | 底部のみ残存 |
| 59 | 南調 | SD101（河） | 土師器<br>甕 | 胴13.4 底 7.8 | 底部糸切 | にぶい黄橙色 | 密。砂粒少、骨針<br>少、雲母片極少。 | やや<br>良 | 底部、胴部のみ残<br>存 |
| 60 | G | SD301（河） | 土錘<br>（紡錘形） | 径3.87 厚 2.8<br>孔径 1.1<br>重38.0 | | 灰黄褐色 | 密。骨針極少。 | 良 | |
| 61 | F | | 土錘<br>（球形） | 長6.96 厚 3.2<br>孔径0.95<br>重14.8 | | 灰黄褐色 | 密。砂粒極少、骨<br>針極少。 | 良 | |
| 62 | E | SD301（河） | 漆器<br>皿 | | | 黒色 | | | |
| 63 | G | SD301<br>上層（河） | 青磁<br>碗 | | | 素地：灰白色<br>釉：透明な明オ<br>リーブ灰色 | 密。 | 良 | 外面蓮弁浮彫 |

| No. | 名　称 | 出　土　地 | 長さ | 幅 | 厚み | 重　量 | 石　材 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 打製石斧 | ＳＤ201－1 | 21.9 | 10.3 | 2.4 | 555.2 | ヒン岩 | |
| 2 | 打製石斧 | Ｆ区　ＳＤ310 | 17.7 | 9 | 2.6 | 469.5 | 火山礫凝灰岩 | |
| 3 | 打製石斧 | ＳＤ201－6　上層 | 17.8 | 8 | 3.5 | 630 | 安山岩 | |
| 4 | 打製石斧 | Ｅ区　ＳＤ310　上面 | 15.1 | 10.6 | 3.7 | 735 | 火山礫凝灰岩 | |
| 5 | 打製石斧 | ＳＤ201　最下層 | 9.2 | 6.1 | 2.5 | 202.4 | 火山礫凝灰岩 | |
| 6 | 石鏃 | ＳＤ201　最下層 | 4.2 | 1.4 | 0.4 | 2.4 | 輝石安山岩 | |

| No. | 名　称 | 出　土　地 | 長さ | 幅 | 厚み | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 井戸枠 | ＳＥ01 | 73.2 | 63.1 | 7.8 | 2と接合 |
| 2 | 井戸枠 | ＳＥ01 | 74.5 | 63.7 | 7.2 | 1と接合 |
| 3 | 井戸枠 | ＳＥ01 | 66 | 45.2 | 6.8 | |
| 4 | 井戸枠 | ＳＥ01 | 71.9 | 25.6 | 5 | |
| 5 | 柱根 | Ｐ205 | | | | |

# 追　　補

本遺跡の第１次調査で１号溝とつけられた遺構から遠賀川式の可能性のある土器の底部が検出された。本報告書作成終了直前にこの事の報告漏れに気付いた。ここで追加して遺構と遺物について報告したい。

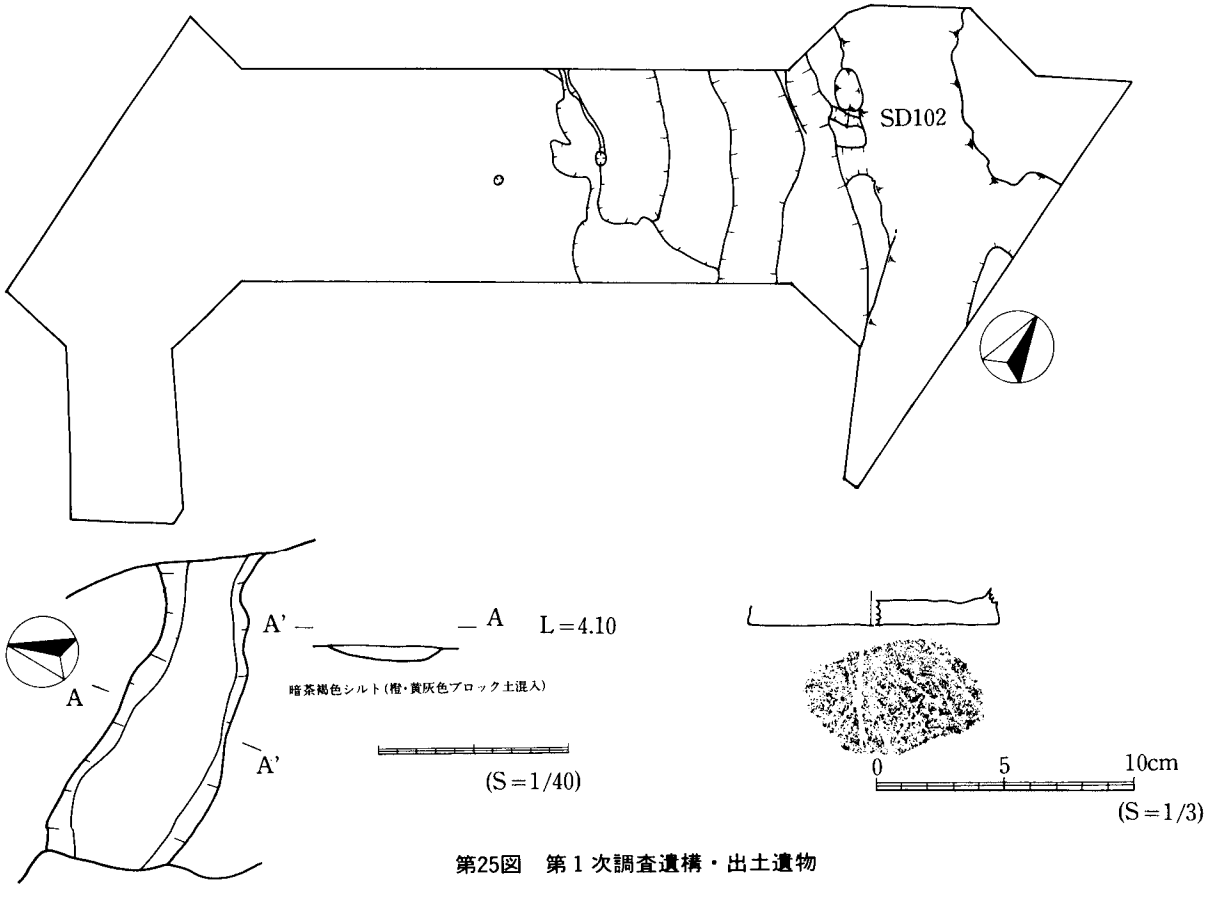
**遺　構**

ＳＤ102

第１次調査区は北調査区と南調査区に分かれており、当遺構は北調査区の自然河道に直行するよう方位をとる。東西方向に流路をとるが検出されたのはごく一部で東西両方向とも河道により切られる。深さはわずか10㎝で、暗茶褐色のシルト単層の埋土である。元々の上層部分はかなり削平を受けていると思われる。

**遺　物**

ＳＤ102からはわずか２点の土器片が出たにすぎない。図示したものは壷の底部である。同時に出土した土器片は図示に耐えなかったが胎土から在地の柴山出村式土器と見られ、図示したものは在地のものとは違う胎土である。時期的にも遠賀川の可能性が考えられる。色調は暗赤褐色、胎土は細かい砂粒と焼土粒を含む。海綿は含まない。体部への立ち上がり部分が若干残る。底部は葉脈の圧痕が幾重にも見られる。




第25図　第１次調査遺構・出土遺物

## ま と め

今回の調査において遺構として明確に把握できたのは、古代のみである。調査区ではちょうど河道跡が中央に位置し、その両岸の遺構を検出したことになる。遺物量は少なく、河道跡（上層、上面）以外のものはごく少量である。

遺物からみた年代では、8世紀後半に属すると思われる須恵器から、11世紀の内面黒色土師器椀、14～15世紀に属する青磁片まで存在するが、ほぼ大半は8世紀末～9世紀前半の須恵器と内面黒色土師器椀である。

景観の復元を試みてみると、河川をはさんで西岸は梁行2間・桁行5間の大型掘立柱建物（F区・SB301）と少し離れて転用材の枠を持つ井戸（A区・SE201）が存在する。そのほかの遺構の存在は全くみられず、また建物の建て替えが行われていないことから、平安時代の8世紀末から9世紀前半の一時期のみに存在したものと判断される。また建物廃絶の際、柱材は抜いて持ち去っている。それに対し、東岸は梁行2間・桁行3間などの小規模の掘立柱建物が2、3度立て替えられていたり、数棟が同時に建っていた可能性もあり、様相が異なっている。両岸の地域が同時期に併存していたことは、出土遺物などからほぼ間違いがないものと思われる。河川が土地利用の区画となっていた可能性が強い。

「河」や「天」の墨書土器が出土すること、集落が河岸のすぐそばに営まれていること、約800mと非常に近い距離に立地することなどから西念・南新保遺跡との関係が注目される。集落規模としては、数倍の違いがみられる。

出土遺物や堆積状況から見て、河道跡が主に利用されていたのは古代であろう。
井戸SE201の井戸枠が、準構造船の材を使用したものとすれば、検出された河道跡のような小河川を利用した水運で使用されていたものの転用とも考えられる。低湿地帯のため、周辺遺跡の調査では、必ずと言っていいほど河道跡が検出されている。これらが古代において有益な交通手段として利用されたものと思われるであったことは疑うべくもない。中世には自然堆積により、淀みの状態になっていたものと思われる。調査区内で集落を検出できなかったが、近辺に生活の場があった可能性が考えられる。（熊谷）

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | かなざわしふたつやまちいせき |
| 書名 | 金沢市二ッ屋町遺跡 |
| 副書名 | 金沢西部地区土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書4 |
| 編著者名 | 松浦郁乃、熊谷葉月 |
| 編集機関 | 石川県立埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒921－8044　石川県金沢市米泉町4丁目133番地　TEL076－243－7692 |
| 発行年月日 | 1998年3月27日 |

| 所収遺跡名 | 所在地 | コード(県番号) | | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | 市町村 | 遺跡番号 | | | | | |
| 二ッ屋町遺跡（ふたつやまちいせき） | 石川県金沢市（いしかわけんかなざわし）二ッ屋町地内（ふたつやまちちない） | 17201 | 01291 | 36°35′19″ | 136°37′52″ | 第1次 1989. 6.26 ～1989. 7.28<br>第2次 1995.11. 8 ～1995.12.26<br>第3次 1996. 4. 9 ～1996. 6.13 | 第1次 約1,300㎡<br>第2次 約2,500㎡<br>第3次 約2,300㎡ | 区画整理 |

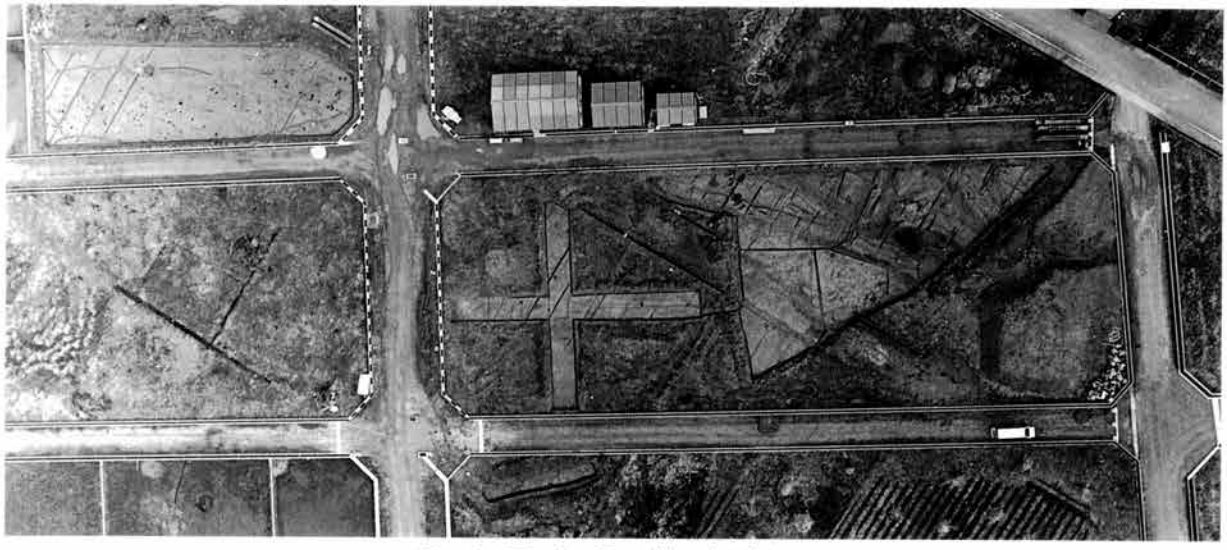
| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 二ッ屋町遺跡 | 集落 | 弥生<br>奈良<br>平安<br>中世 | 河道跡<br>掘立柱建物跡<br>溝<br>土坑<br>井戸 | 弥生土器<br>石器<br>須恵器<br>土師器<br>木製品 | |

遺　跡　遠　景　（南東から）

作　業　風　景　（第１次調査）

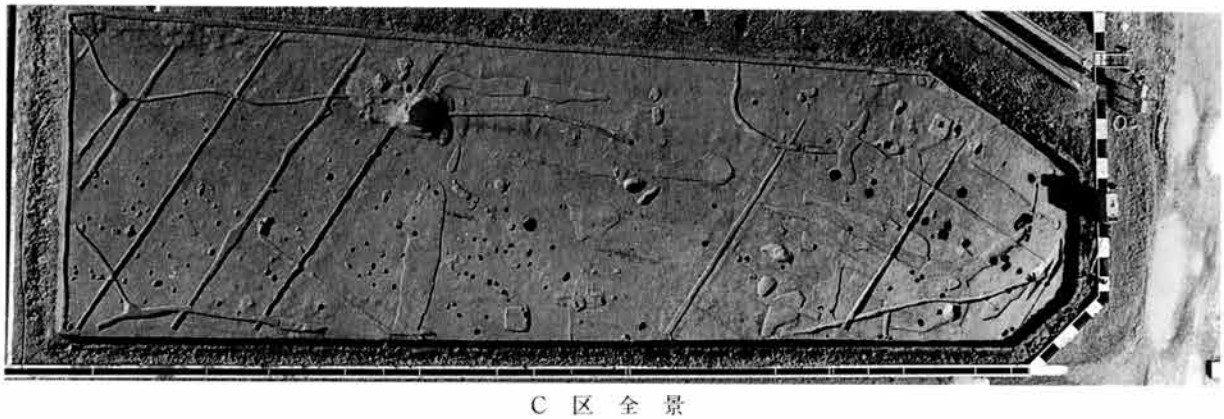
北 調 査 区 全 景

南 調 査 区 全 景



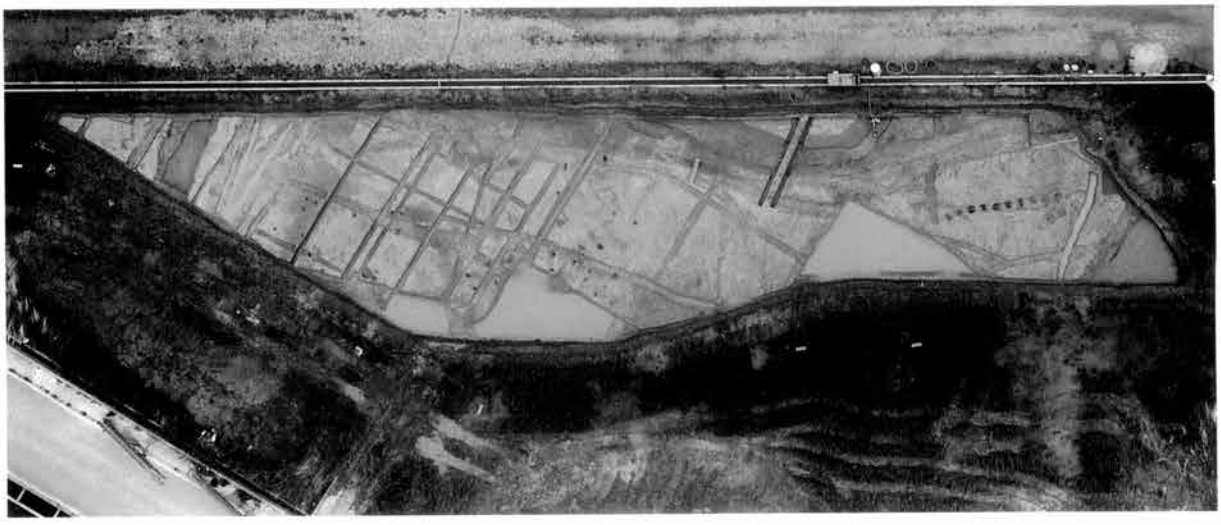
調　査　区　全　景　（第２次調査）

A　区　全　景

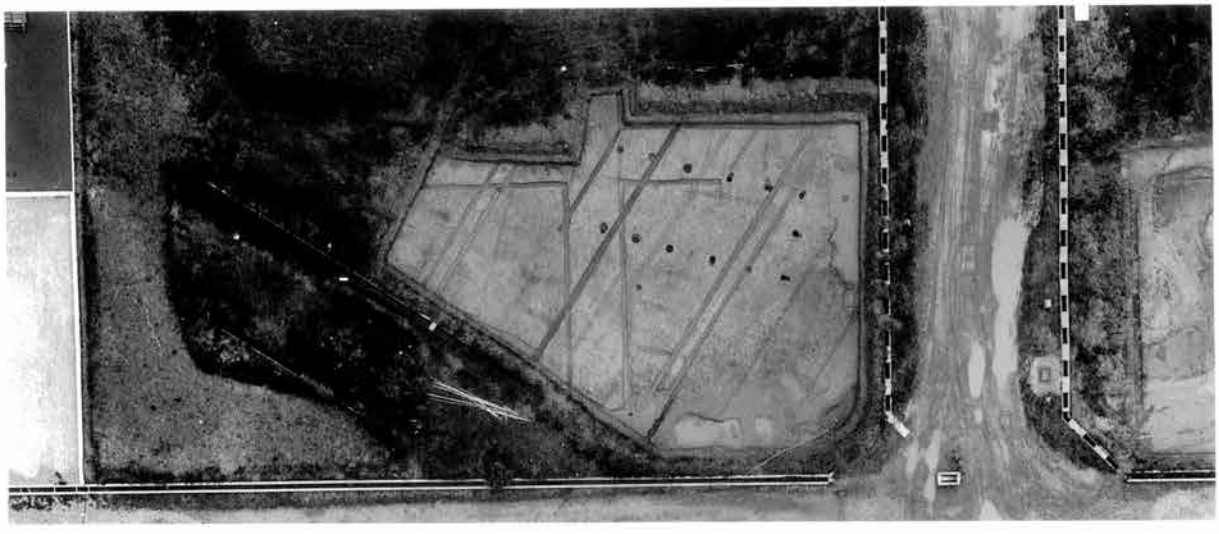


C　区　全　景

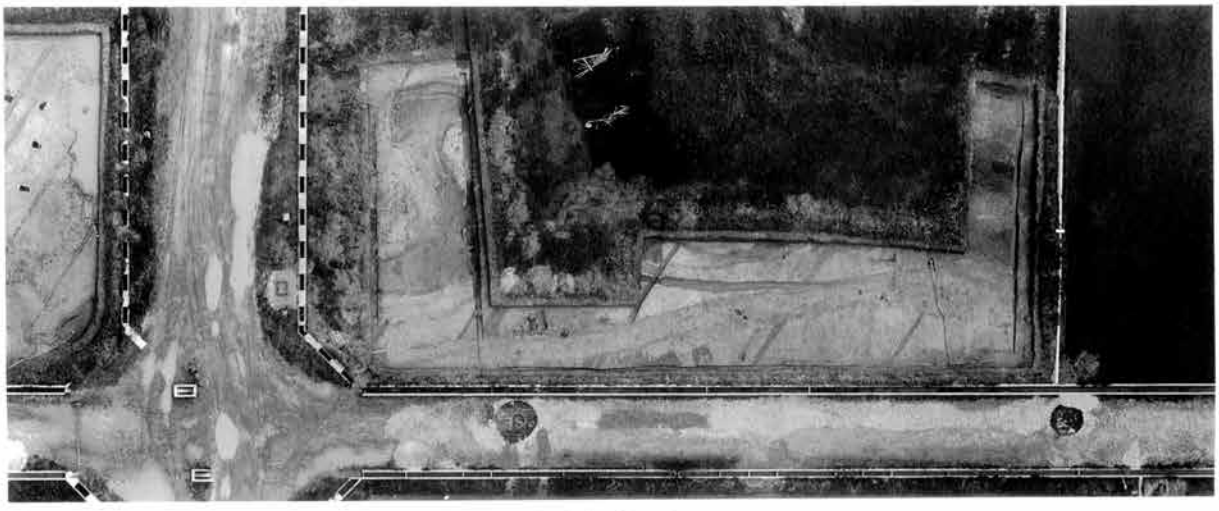
写真図版4



E 区 全 景



F 区 全 景



G 区 全 景

南調査区　SD101

A区　SD201

E区　SD301

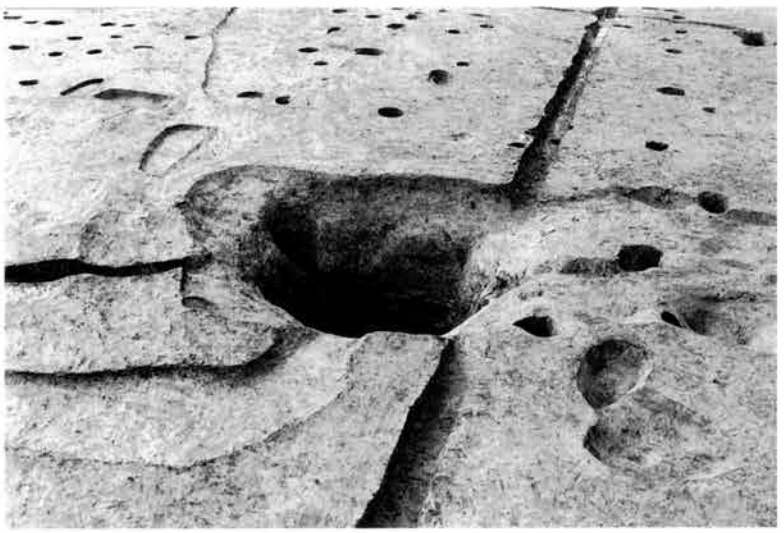
写真図版6

北調査区　SD101

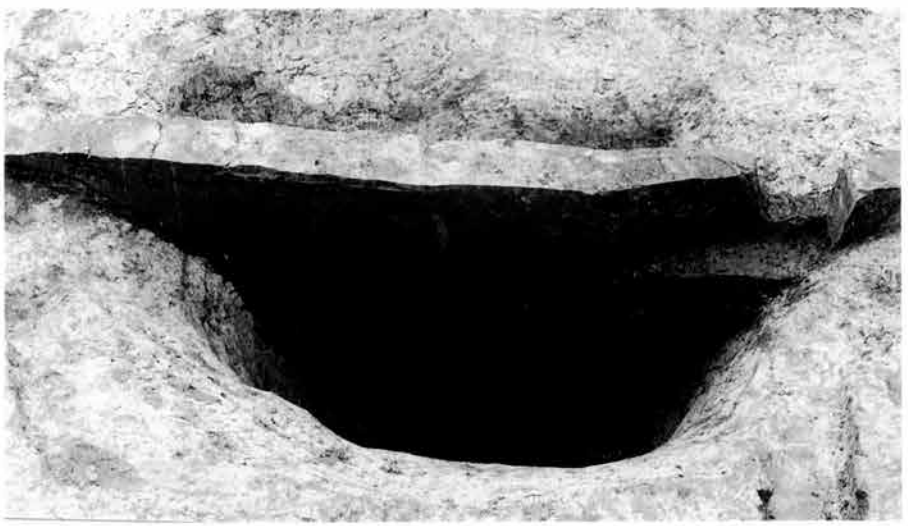
G区　SD301

E区　SD301
土層断面

A区
SK210～SK214



C区
SK208　完掘



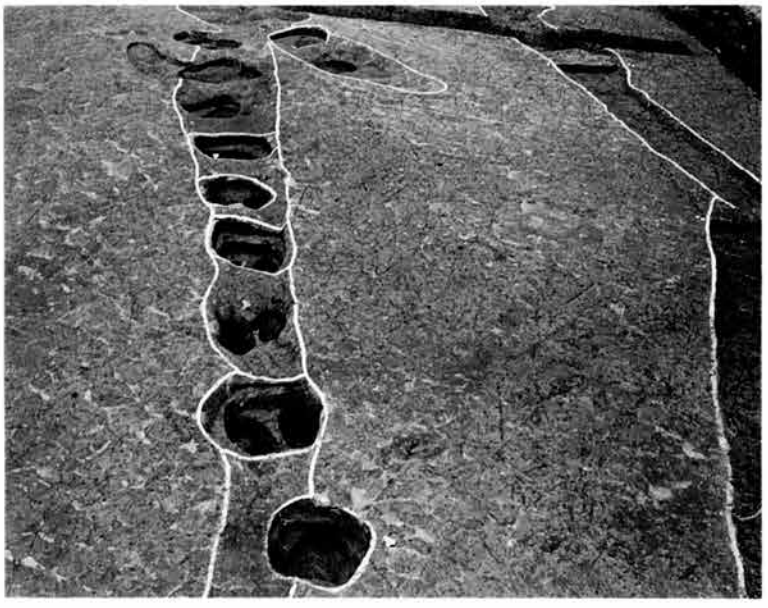
C区
SK208　断面

C区　SB201（南より）

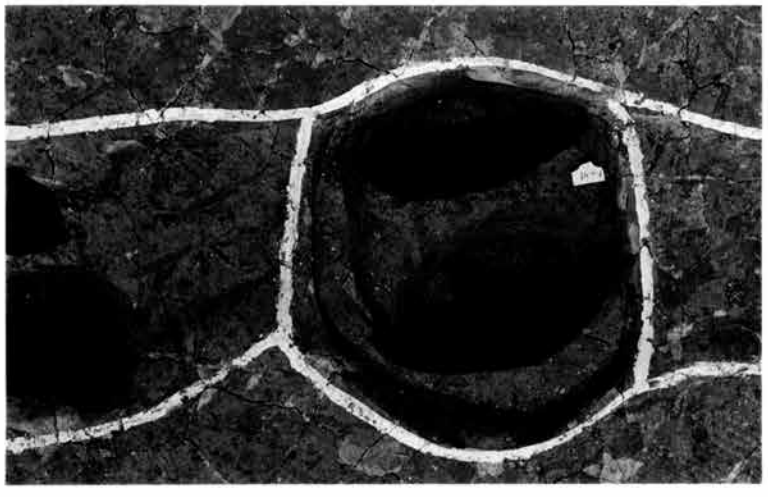
C区　SB202

C区　SB203

E区　全景（北から）

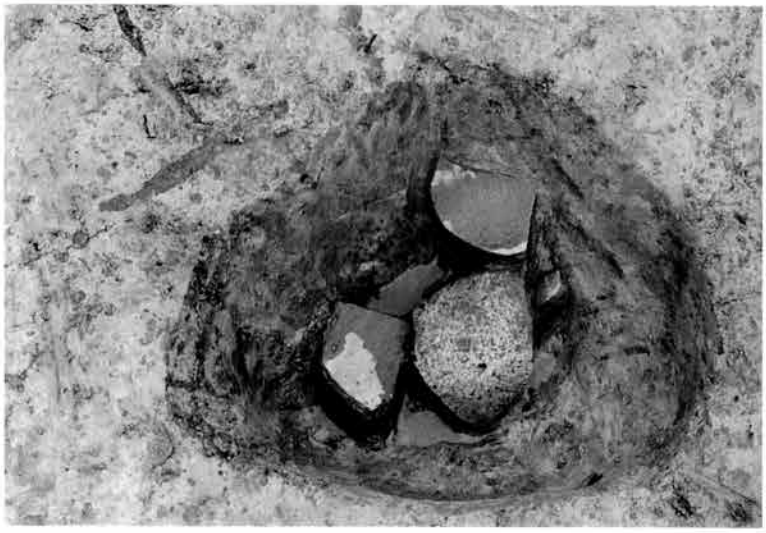


E区　SX301　（南から）



E区　P.319（西から）

F区　SB301(北から)



F区　P.314

A区　SX202

1

2

6

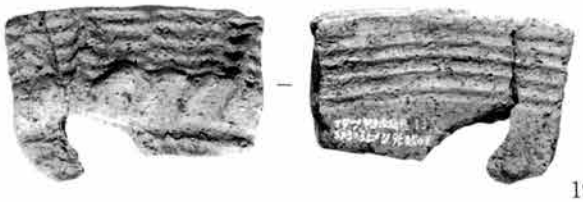
3

4

5

7

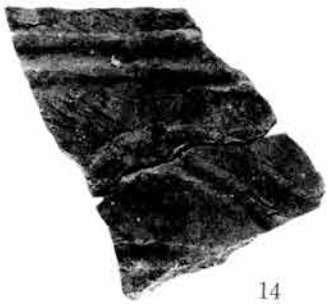
18


19

17

8

9


14

15

13

16

10

11

22

23

21

23

25

26

24

31

29

30

28

27

32

33

34

35

36

37

41

38

46

39

40

47

42

43

44

42

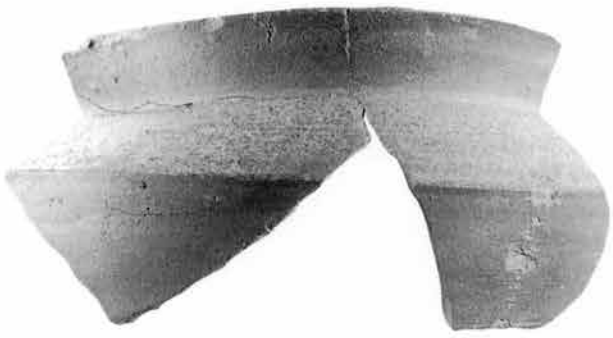
43

45

48

写真図版14

49


48

55

52

56

53

25

54

58

57

60

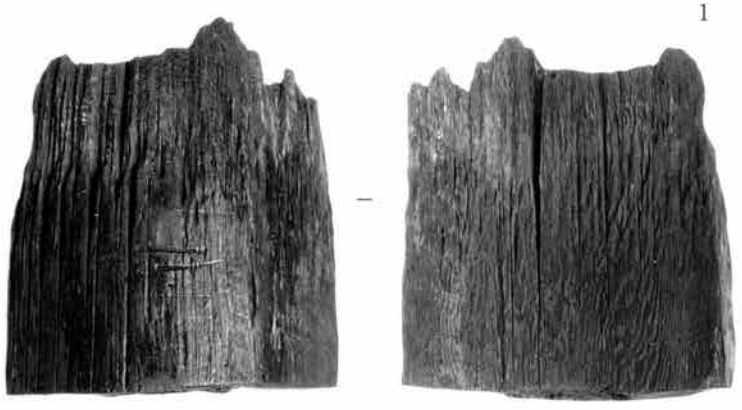
61

62

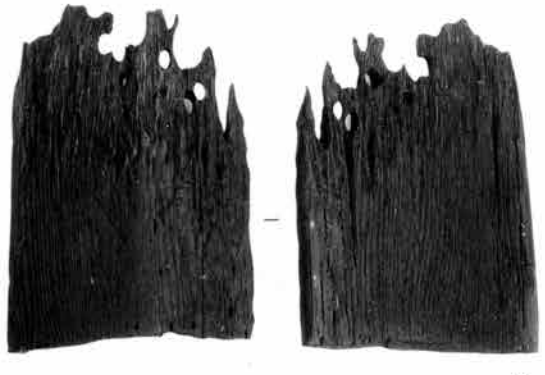
64

63

1



2



3

4

5

1

2

3

4

5

6

# 二ッ屋町遺跡

金沢西部地区土地区画整理事業にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書4

発行日　1998（平成10）年3月27日

編集・発行　石川県立埋蔵文化財センター
〒921－8044　石川県金沢市米泉町4丁目133番地
電話（076）243－7692（代）
FAX（076）243－8988

印刷　ヨシダ印刷株式会社
〒921－8546　石川県金沢市御影町19番1号